

タチウオの想い

小田 忠

序

タチウオの由来に二説がある。有名な説だから釣りをしない方も知っている筈である。釣り上げたタチウオを見ると、太刀の様な姿で、長さも八十センチから一メートルぐらいが普通だから長さ薄さも申し分ない。色は銀白色で太刀の輝きに似ている。もう一つの説は、タチウオは立って泳ぐから「立ち魚」と命名された、という。現在なら科学的に実証できるが水中カメラがない時代から「立ち魚」と呼ばれていた。素潜りや潜水士は「立ち魚」を見ることができない。両者とも二十メートル以上を潜ることが困難で、運よくタチウオがいればいいが自然相手に遭遇する可能性は低いと思う。潜水士が見た可能性はあるが、これも明治時代以降の話で記録がない。それとも漁師は船上からタチウオが立って泳いでいるのを見たのだろうか。太刀は古い

時代から存在しており、古い文献にはタチウオの名前が出てくる。タチウオの形状から太刀魚と命名されたらしい。「立ち魚」は明治以降に付いた名前であるように思う。

しかし、偶然、平成二十七年（二〇一五）一月二十五日にNHKテレビで放映された〈ダーウィンが来た！「タチウオ千本刀」〉には、おびただしい数のタチウオが立ち泳ぎをしていた。当初、豊後水道で撮影をしたが潮の流れが速く撮影機材が流され、タチウオの立ち泳ぐ姿が撮れなかった。新たな情報によると神奈川の横須賀にタチウオがいる、という。東京湾に入ったタチウオを水中カメラマンの尾崎幸司氏が撮影をした。ナレーションでは、東京湾に入ったタチウオが大きくなって群れを組んでいて結構な量が見られる。流れがゆるやかな場所です立ち泳ぎをしているタチウオの姿が見られる。再びナレーション

を聞く。水深は四十メートル、映像には千匹以上いるタチウオの群れをとらえていた。タチウオが群れになる理由として、潮がおだやかな休憩しやすい場所に集まってくる。群れを組んで外敵から身を守る、たとえば大型魚などから襲われると群れで一せいに光を反射して、鯨などの敵を驚かせる。

1 「タチウオ」が知られた頃

朝日新聞の朝刊、日付は二〇一三年十一月四日の科学欄に「マグロ先祖は深海魚⁽²⁾」のタイトルで「祖先は同じ？マグロやサバの起源」とした記事があった。この中に新分類学ペラジアという聞きなれない言葉を見つけた。ペラジアはギリシア語で「外洋に住むもの」を意味する。そこにタチウオの説明が付されている。

「共通の祖先は、タチウオのような細長い形で、水深四百メートルぐらいの深海に生息していたと考えられている。この祖先から分化が始まったのは、巨大隕石がメキシコのユカタン半島周辺に落下して、恐竜などの大量絶滅が起こったと考えられている約六千五百万年前と見られる。」人が文明を作る以前から個体数を増やして世界に広がっていた。日本近海でタチウオの姿を見るのは自然なことだった。

古い国語辞書の「伊京集⁽³⁾」は室町時代末期の筆写本で、そこにはタチウホ・魴といった字がある。応仁の乱（一四六七年頃）の前あたりであろうか。慶長八年（一六〇三）に本編、慶長九年（一六〇四）に

補遺ができた「日葡辞書⁽⁴⁾」には、「タチウヲ、または、タチイヲ（太刀魚）TACHI（太刀）」と呼ばれる。『宝永五年（一七〇八）に成立し、翌年刊行された『大和本草⁽⁵⁾』の巻十三の海魚では、形は刀に似て長く薄い、背は青く腹は白い。長いタチウオは二三尺で幅は狭い、とある。

「本草綱目啓蒙⁽⁶⁾」万曆二十四年（一五九六）は、タチウオハ形長クシテ鱧ニ似タリ、とある。

「本朝食鑑⁽⁷⁾」は元禄十年（一六九七）に出版された。タチウオの項を覗くと、ちょうど我が国の太刀の短狭なものに似ているので、俗称はタチウオというところ。

「和漢三才図会⁽⁸⁾」は「本草綱目」より引用しているが、「和漢三才図会」の著者人見必大は、瀬戸内海にいるタチウオについて、八、九月に鰯と同時に盛んに出る。和泉・播磨に特に多い。大きなもので三、四尺。小さなもので一、二尺。すでに江戸時代には知られていた。

「物類称呼⁽⁹⁾」は、安永四年（一七七五）に刊行された「全国言語辞典」。そこには簡単に書いてある。「太刀魚 たちうを 筑前にて ながだちと云」。

西鶴が存命中に詠んだ句が大矢数にある。⁽³⁷⁾

たち魚を錦の袋に入られたり 二 243

意味は、タチウオと刀を掛けた句で、タチウオは銀色に輝き、頭から尾にかけての姿とタチウオが似ている。つまり、太刀に見立ててい

る。このためタチウオを刀剣袋に収めた。実情は誰が見ても刀剣とタチウオは異なるが、タチウオの銀白色と刀剣の輝きが近似している。古くから〈太刀魚〉という字をもっているくらいだ。また、刀剣とタチウオの形状が似ている。

大阪の人だからタチウオを食味して知っていたのかもしれない。

タチウオを詠んだ句の多くは、タチウオが太刀と似ていると詠んでいる。タチウオの姿を材料にした句には、後述する正岡子規や無諍のようないさましい句がある。

時代は下がって寛政五年（一七九三）蝶夢により俳諧「新類題発句集」⁽¹⁰⁾が出された。その秋の部に「たち魚の影やひらりと磯の波 無諍」とあるがこの句なら別にタチウオでなくてもよいように思う。海岸が見える場所から詠んだものなら納得しがたい。タチウオが海岸近くの磯辺に来るのは、現在なら生態系から見ても疑問である。日中は深海に棲むタチウオは、夜半から海面近くに浮上してエサを食べる。日中でも海面下十メートルから二十メートル、尤も東京湾でのエサ釣りは数メートルで釣れるときもある。海水温度・エサの状態によりタチウオが移動する。しかし、イワシなどを追いかけて海面近くに浮上する可能性は否定できない。だが水面下、タチウオの影が視認できたことも疑念である。

正岡子規にもタチウオの句があつて⁽¹¹⁾

太刀魚の水きつて行く姿かな

稲妻や太刀魚はねる浪かしら

明治二十五年（一八九二）の作で、正岡子規が豪快なタチウオの姿を詠んだ句で、両句ともタチウオの勇ましさを詠んでいる。無諍も子規もタチウオの凄まじさをイメージしていたのは、俳人の想像力なのだろうか。

次の話は興味深いので、俳人の想像通りになるといいのだが。

渡辺誠は、論文「カツオ釣り用の角釣針について」の終わりに「三浦三崎に実家の親戚があつた私の母親は、昔は陸釣りでもカツオが釣れたものだ、よく話してくれたことを思い出す。」と記した。渡辺は一九三八年生まれだから、母親は明治の終わりから大正の初めの期間に息子を出産しているのではないか。大正時代以前の話として進める。そもそも大正時代以前にエサとなるイワシは、どのような状態であつたのか。

この話の裏付けとして、四月二十七日(水)にNHKで放映された、「見えるぞ！ニッポン」「高知県」カツオの一本釣り⁽¹²⁾のナレーション、「これは町の神社にある絵馬、昔は小さな舟で行けるくらい近くでカツオがとれました。一匹ずつ竿で釣り上げる一本釣りです。」
www.nhk.or.jp/syakai/mieruzo/ このナレーションには深い意味が隠れていて、近辺でカツオが捕れるのはエサとなるイワシの存在がある。

陸近くにイワシが寄って来るからカツオが釣れるチャンスがある。これは、たまたま回遊したのだろうか。イワシについて山口和雄は次のように語っている。

『日本漁業史』⁽¹⁴⁾ イワシ漁業の項によると、原始時代から中世にかけてのイワシについて、「しかし、イワシはわが国沿海に非常に豊富に魚族であるので、既に石器時代からわが国沿海人によって漁獲されていた。貝塚より発見される魚骨の中にはマイワシ・カタクチイワシの骨が見出されて居る（直良信夫「古代の漁獵」）。古代に於ては、備中・安芸・周防・紀伊・讃岐等が比較的重要なイワシ産地で、延喜式によると、右五力国から中男作物として大イワシ又はヒシコイワシを献じて居る。近世において西国漁場として、阿波・土佐・伊予・豊後・筑前・肥前・日向・対馬・長門・紀州」等にいると書いている。この地域は、カツオだけでなく、タチウオ漁の盛んな場所でもある。

「カツオについても、江戸時代から明治前期にかけては、カツオは未だ内湾近く襲来したので、釣のみでなく網を以て漁獲した。」この記述でイワシは沿岸に来ていたことがわかるし、イワシをエサとするカツオも来ていたことがわかる。

西国から千葉県に目を移すと、勝浦市鵜原の海岸には、かつて沢山の松が繁っていた。松の樹影が海面に広がり、カタクチイワシが入り江に入ってきた。明治の末期から大正時代にかけては、イワシの習性を利用した海岸でのイワシ漁が盛んに行われていた。このあたりの海岸をくり抜きイケスとしてイワシを畜養していた。⁽¹⁵⁾ イワシはカツオ漁だけではなく、イワシを追ってタチウオがエサとしていた。イワシ以外にも秋刀魚も好物である。そういえば、大阪の南の地域に行くと助松がある。昭和三十年代は海水浴場として賑わっていた。砂浜から国

道にかけて沢山の松並木が存在した。残念ながらこのあたりに岩場はなかったように思う。

『富士市の沿岸漁業』⁽¹⁶⁾ に所収されている明治二十七年（一八九四）の「静岡県水産誌」⁽¹⁷⁾ には、一本釣りの対象魚としてタチウオを紹介している。富士市にもイワシが回遊し、それを狙って沢山の魚が集まり、タチウオの一本釣り漁も盛んだった。先の無諍の詠んだ句を信じるとすれば、岩場に松があり、松影に寄ってくるイワシを追ってタチウオが勇壮な姿を見せたかもしれない。

『江戸前に生きる』⁽¹⁸⁾ には、東京湾の表層中層にいて食べられた魚の一つにタチウオがある。現在でもタチウオ釣りには、エサをつけている。

2 「タチウオ」を食べた頃

江戸で食べられた魚はどのような種類があるのか。素朴な疑問である。江戸の自然誌をテーマにして、岩崎常正が文政七年（一八二四）に書いた『武江産物志』⁽¹⁹⁾ を読むと、海釣りに親しんだ人には馴染みの魚名がでてくる。

黒鯛、ぎす（シマダイとも言う、タカノハダイ、広辞苑ではシマダイとは東京ではタカノハダイを指し、地方ではイシダイのこと。私達は石鯛の方が馴染みがある。小さいのを三番叟と呼んでいる。）カレイ、コチ、ボラ、スバシリ（ボラの小さな称）めなだ、鱸、セイゴ（鱸の幼名）イナダ（出世魚で、東京あたりでは

ワカシ・イナダ・ワラサ・ブリ、大阪あたりではツバス・ハマチ・メジロ・ブリと呼ばれている。海タナゴ、アイナメ、藻魚（もうお、一般的に海藻付近にいる。メバル・ハタ・ベラ・カサゴなどの魚）イシモチ、イサキ、鰺、オコゼ、ヤガラ、鯖、コハダ、コノシロ、鰯、ハゼ、キス、サヨリ、ダツ、白魚、雑魚、フグ、鰻、アナゴ、アカエイ、蛸、スルメイカ、海月、ナマコ、シバエビ、シャコ、アミ、アオウミガメ、ガザミ（ワタリガニ）などがある。

天保二年（一八三一）に発行された「魚鑑」⁽²⁰⁾は日本橋の魚河岸で見聞した魚を集めている。ここからは海に係る魚を拾った。

いな（ボラの幼名）いせごひ（畿内の呼び名、関東ではめなだ、ボラによく似ているが口あたりが赤みを帯びている）鰯、イシモチ、いるか、イシナギ（体長約二メートルになる）いたちうお（全長六十センチ、体色はイタチの色に似て茶褐色）イサキ、イトウオ（糸魚、いよりだいの異名、イトヨの異名）イカナゴ、イホゼ（いぼぜ、イボダイの異名）イカ、ハゼ、ハタハタ（出羽秋田に多い）はたじろ（はたしろ、まはたの異名）鰻、にべ（全長八十センチ、東北地方から東シナ海にかけて分布）にしん、ホウボウ、トビウオ、オコゼ、鰹、カマス、鰺、カサゴ、カガミ鯛（マトウダイと混称されることが多い）カナガシラ（ほうぼうに似ているが色が少し薄い）鯛、鰻、タチノウオ（タチウオ）ダツ（全長一メートル北海道東岸から東シナ海まで分布）タカベ（全

長二十五センチ本州中部から九州の太平洋側に生息）蛸、ムツ（全長一メートル五十センチ、東北地方以南、台湾あたり）鰻、うきぎ、うにこうる（ポルトガル語でウニコールという、一角をいう）鰻、黒鯛（西国ではちぬだい、俗にかいずという）ヤガラ、八つ目鰻、マグロ、マス（海より河川にのぼる）マナカツオ、ブリ、ブダイ、フグ、コチ、コノシロ、（初年をこはだ、二年をこのしろという）コハダ、鮫鰻、アマダイ（グジ）アラ、鰺、アナゴ、アブラコキ、サメ、サンマ、鯖、さはら（小さいのをサゴシという）鮭、キス、ギンザウオ（一名かいわり・マナカツオに似ている）ぎんぼう、ぎぐう、メバル、白魚、シイラ、シャチホコ（サカマタともいう）エイ、エソ、海老、ヒラメ、ヒシコ（ヒシコイワシの略）もうお（西国ではイソメバルという）鰻、スナメリ（体長一メートル八十センチ、ネズミイルカ科）等の多種に及んでいる。

「詩本草」⁽²¹⁾は万延元年（一八六〇）柏木如亭が旅をしながらの見聞録だが、タチウオを食した印象を書いている。「東海に太刀魚有り。即ち閩中の帯魚なり。春夏の交、味頗る美なり。余好みてこれを啖ふ。然れども人家賤視して客に供することを屑とせず。往年、道傍の小店に喫す。酔後、戯れに小詩を書して店小二に与ふ。」

『江戸料理読本』⁽²²⁾この書籍には魚介料理として、宝暦六年（一七五六）刊行、勝間竜水著「名産諸色往来」を記し、この当時の魚介類、貝などを六十ほど記しているがタチウオは出てこない。日本橋での魚

河岸で多くの魚介類があり、格付けもなされていたが、タチウオの名前はない。更にこの著者は江戸時代の九冊の料理書を選び、七冊以上に登場する魚介類を調べた。

「料理塩梅集」寛文八年（一六六八）

「料理献立集」寛文十一年（一六七二）

「古今料理集」延宝二年頃（一六七四頃）

「合類日用料理抄」元禄二年（一六八九）

「傳演味玄集」延享二年（一七四五）

「料理伊呂波包丁」安永二年（一七七三）

「新撰包丁梯」享和三年（一八〇三）

「年中番菜録」嘉永二年（一八四九）

「会席料理秘囊抄」嘉永六年（一八五三）

右の料理書に同じ魚が七冊以上登場するのは十九種ほどで、ここにはタチウオの名前はなかった。個々の料理書にあたれば一冊ぐらいはあるかもしれない。期待しながら調べると思いが届いたのか「新撰包丁梯」にタチウオ料理が記載されていた。引き続き他の史料を調べた結果、左記の六冊にタチウオ料理が掲載されていたことが判明した。

「万宝料理秘密箱」寛政十二（一八〇〇）

「四季献立会席料理秘囊抄」文久三年（一八六三）

「会席料理細工包丁」文化三年（一八〇六）

「素人包丁」二編 文化二年（一八〇五）

「料理綱目調味抄」享保十五（一七三〇）

「当流料理献立抄」刊記不記 宝曆・明和（一七五二—一七七二）では、どんな料理なのか、現在でもタチウオの塩焼き、煮つけ、刺身などが思い浮かぶ。タチウオの天婦羅もある。タチウオを三枚におろし、大葉か梅肉をタチウオにのせてくるくる巻き、爪楊枝を刺して留めて、天婦羅粉を付けて油で揚げる。右の文献中一番古い「料理綱目調味抄」の項目を見ると、たち魚、樺焼とだけあって詳しい調理法の記述はない。次に古いのが「当流料理献立抄」で、刊記がない。専門家の見立てでは宝暦・明和頃の作だと言われている。焼物之部にたち魚の名前の横にしほやき、いりものと書いてある。これも詳しい調理法がない。

寛政十二年に出た「万宝料理秘密箱」には、タチウオのみそ漬の技法が紹介されている。大きなタチウオを、ふり塩にして、味噌に漬け、二日ほど取り出し、紙で拭く、とある。タチウオを三枚におろす記述はない。味噌から出した後、味噌を拭き、焼く記述がない。刺身が第一とある。タチウオ料理はいろいろあるらしい。吸い物もある。盛り付けとして、台引き、よせやき物、とりさかながある。最後に茶料理向きと著者は言う。五年後に出た「素人包丁」二編は文献中タチウオ料理の種類も多く、調理法も他の文献に比較にならないほど詳しく書かれている。実に十九種類を紹介している。

タチウオぬた

タチウオの大きさに関係なく、三枚におろして 腹骨を取る。身は筋違いに細く切る。塩を少し降ってまぶす。辛子や唐辛子

等の酢味噌に削り大根、ミョウガの子、きゅうり、白うりのどれか一品をあしらってめたあえにする。鉄砲和より味噌を薄くする。

タチウオ鉄砲和

塩をまぶすところまではタチウオめたと一緒である。唐辛子味噌に木くらげ、大根を和えるが大根だけでもよい。大根はさがき牛蒡のように削り、塩で揉み水でよく洗い、絞って水気をとる。

タチウオオランダ和

身を筋違いに作り、酢に醤油を少量入れ、しばらく漬け置く、絞り汁を味噌と和える、この味噌は焼き味噌を少しこがし、摺って酢の中でとく、揚げとつぶ、きくらげ、削り大根、ねぶか小口、椎茸、唐辛子などを一緒に和える。酒によくあう肴である。

タチウオ巻焼

小さなタチウオを三枚におろす。皮のほうを内側にして串に巻く、醤油を付けるか焼き塩にして、切る。取り肴、組肴に使う。

タチウオ田楽

タチウオの大小に関係なく三枚におろし串に巻き付ける。竹串を刺して止める。白やきにして、山椒味噌か唐辛子味噌を付けていただく。

タチウオ蠟焼き

前の通りタチウオを三枚におろし、腹骨をとる。串に巻き付け、白焼きにする。玉子をとき、付け焼きにして焼く、遠火がよい、取肴に使う時は身に塩を少しあてて焼く。

鱈もどき

タチウオを三枚におろし、腹骨をとる。身を糸づくりにする。木くらげ、きゅうり、大根（六角にむき小口切かさね）小八^{（鉢）}に三品ともに盛り、難波酢に生姜の絞り汁をかける、下に溜めて出す。合わせた酢に味噌を少し混ぜてもよい。きゅうりがなければ三つ葉、せりのじくでもよい。

オランダ鱈

タチウオの大きさに関係なく、三枚におろす。心任せに切る。細い串に四つか五つほど刺し、油で付け焼きにする。ねぶかを割り、さつと湯煮にして、よく水気をとって鉢に入れて出すか手塩皿に盛って出す。いずれにしても三杯酢を溜めて唐辛子の小口上に置く、はなはだ酒によくあう。

あんかけ

タチウオの大小に関係なく三枚におろす。腹骨を取り、筋違になるように切る、松茸、蕪、大根の一品をタチウオの身と一緒に蒸す。鉢の上から葛溜まりをかける。生姜、山葵、胡椒を乗せる。また、茶碗などで味噌をかけてもよい。

敷味噌

これも前のように三枚におろし腹骨を取る。筋違に切り、岩茸、木くらげなどをあしらひ、蒸茶碗にて敷味噌または敷あんのどちらでもよい。味噌はどの味噌でもよい。

吸もの

タチウオの大小に関係なく三枚におろす。腹骨をとり、両身を二つに切り、立てに三つほどに切り、いかようにも結ぶ。すまし、薄くす、赤みそ、塩仕立て、これらは吸い物にする、塩仕立ては身にすこし塩を振る、その後仕立てる。あしらひものはその時に見合わせる。吸口は胡椒、木の芽、生姜、山葵、山椒、柚などを見合わせて置く。

塩仕立

タチウオの大小に関係なく三枚におろす。腹骨をとり、両身を二つに切り、立てに三つほどに切り、塩を少し降る、しばらく置く、鍋に塩を少し入れ、煎り付ける。後、水を入れて炊く。なおまた塩を当て身を水でよく洗う。そして使う。あしらひは、葉付け大根、同蕪、岩茸、松茸、しめじ、このなかで見合わす。吸口は胡椒、木の芽、生姜、山葵、山椒、柚などを見合わせて置く。尤も、うしお煮などもいままでのようにすると汁が澄んで椀中甚だきれいだである。風味もよい。

味噌漬

大きなタチウオを選び、ほどよく切る。白みそに漬ける。焼いて出す。また、三枚におろし漬け置き作りもよい。

粕漬

味噌漬けと同じ、タチウオの大きなものを選ぶ、酒かすに漬ける。

きらず和

タチウオの大きさに関係なく水洗いをして三枚におろす。腹骨をとり、塩をあてて置く、さて、豆腐のかすを醤油で煎り付け、タチウオの身を適当に切る。きらずにまぶして鉢に入れる。上に漬け生姜、漬け山椒を置く。鯛の生ずしなども同様。他に説明はないが左記の項目がある。

塩やき

煮付

一夜塩

白やき 醤油をかける

「塩やき」は、塩を振って焼く。「煮付」は、醤油・酒・みりんなどの調味料の中にタチウオの身を入れて煮たもの。「一夜塩」は、タチウオの身に塩を振り、一晚置いて次の日に焼いたもの。「白やき 醤油」をかけるは、タチウオを三枚におろし、焼いたタチウオに、味付けとして醤油をかけたものと想像する。

文化三年発行の「会席料理細工包丁」には、

刀魚 くらげ細切 岩茸 三つ葉 二杯酢 なんきん はり こう

たけ

刀魚 塩焼き刀魚 煎り付け 付け焼き

刀魚 三枚におろして巻きて田楽

刀魚 みそかけ 葛かけ 三枚におろしいかよつとも切蒸している。

以上のように材料や調味料だけで調理法が書かれていない。

文久三年には「四季献立会席料理秘囊抄」が出版された。ここには三品が紹介されている。

タチウオ 蠟焼き

タチウオの大きさに関係なく、水洗いをよくして三枚におろす。腹骨をとり、串に巻き付け、白焼きにする。玉子をよくとぎ、焼き立てにかければ、やがて固まる。今一度遠火で乾かす。玉子に醤油の加減をし、尤も、身に少し塩をする、吸い物煮物なら玉子にも身には調味料の加減をしない。いたって厚味なり。

タチウオ なます

タチウオの大きさに関係なく、三枚におろす。腹骨をとり、糸づくりにする。きくらげ きゅうり 大根 六角にむぎ、きりがさね これらを取り分け、なんば酢に生姜の絞り汁を合わせ

タチウオ 葛かけ

タチウオの大きさに関係なく、三枚におろす。腹骨をとり、いかようにもつくり、松茸 蕪 瓜 大根などを一緒に蒸す。蒸しあがつたところに葛あんをかける。その上山葵か生姜を乗

せる。

これだけ多数の調理をして食べていたことは驚きである。

3 「タチウオ」を網でとった頃

『大阪府漁業史』⁽³⁰⁾の中に「摂津国漁法図解」⁽³¹⁾ 明治十六年（一八八三）がある。同図解には手繰網漁（たぐりありよう）の図がある。どのようなものかといえば、網袋の長さは一丈八寸（約五・四五メートル）、幅は二丈（約六・〇六メートル）、袖網を合わすと長さは四丈（約十二・二メートル）、高さ六尺（約一・八二メートル）、総網長は百五十尋（約二七二・七メートル）、網の長さは各五十尋（約九十・九メートル）で、片端に票樽（目印の浮き樽）を付ける。舟一艘に漁夫二人が乗り組み漁場に出る。一人は櫓を押し、もう一人は網を海中に投入する。浮き樽を目途にして周り、この樽を舟に積み、投錨する。漁夫は船首と船尾に分かれ、網を手繰り、漁をする。この網は五智網とも称し、六月から十一月までが主な漁期で、明治の中頃には、打瀬網漁やツボ網漁にとって代わった。主な漁獲はタコ・エビ・イワシ・タチウオなどである。

『大阪府誌』⁽³²⁾によると、安政年間（一八五四―一八五九）の手繰網は三百一、文久年間（一八六一―一八六三）は三百八、明治元年（一八六八）から明治十年（一八七七）までは三百三十六から三百四十あり、このあたりが最盛期といってもよい、以後減少していく。明治二

表 1

時代	重さ	kg換算
安政	500貫	1,875
文久	300貫	1,125
明治元年	17340貫	65,025
同 5 年	22270貫	83,513
同 10年	14500貫	54,375
同 15年	22850貫	85,688
同 20年	24000貫	90,000
同 25年	21400貫	80,250
同 30年	30860貫	115,725
同 34年	24150貫	90,562

表 2 農林水産省
海産物生産統計調査
単位はトン

	漁獲高
平成 7 年	3,971
平成 8 年	4,170
平成 9 年	3,591
平成10年	3,814
平成11年	6,499
平成12年	3,833
平成13年	2,252
平成14年	2,419
平成15年	1,118
平成16年	1,926
平成17年	2,002
平成18年	2,039
平成19年	1,514
平成20年	1,477
平成21年	1,301
平成22年	820
平成23年	878
平成24年	896
平成25年	870
平成26年	869

十年（一八八七）は二百三十六、明治二十五年（一八九二）は百九十
三、明治三十年（一八九七）は百九十六、明治三十四年（一九〇一）
は二百二十九となっている。逆に打瀬網は手繰網と立場が入れ替わる。

安政・文久年間は四百十、明治元年は増加して五百九十三、明治五
年（一八七二）から明治二十年にかけて、さらに増加していく。六百
四十四から九百二十九と順次増えている。明治二十五年から明治三十
四年は、一千五十から一千五十八にとどまっている。

ツボ網も安政・文久年間は三であったが、明治十年を境にして増加
していき、明治三十年には六十三、明治三十四年には七十九にたっし
ている。間稼網は安政・文久年間は十九だが明治三十四年に至っても
二十三と微増である。

間稼網（まかせあみ）は網船二艘、手船四艘、乗組員約三十人。手
船が魚群を発見すると網入れの方向を指示すると、網船は分載してい
る網を繋ぎ合わせて海中に投下する。網を左右に一直線に開くよう網
船を移動した後、船を斜行させて一力所に集め、網を揚げる。手船は

竿で海面をたたいたり、舷側を敲いたりして、魚を脅して網に追い込
む。クライマックスには網はちょうど手を合わせて水を掬う時のよう
な形になる。タチウオ・ニイラギ・ガラサイ・ツナシ・エソ等を捕え
る、八月から十一月の昼間に操業する。

タチウオの漁獲高を安政年間から明治三十四年までを列記する（表
1）。

大阪湾の漁獲高は凄まじいの一言である。安政年間でも一、八トン
の水揚げがある。明治三十年は百十五トン、同三十四年は九十トンも
水揚げがあった。船体の改良や動力化、さらに網の改良がタチウオの
漁獲高を増加させた一因でもある。和歌山県の有田市は、平成七年
（一九九五）から同二十六年（二〇一四）までの二十年間に実に十九
回も第一位の漁獲高を誇っている。漁獲高を表2に示す。⁽³³⁾

船底曳網漁業でも往時よりは大きく改良されているのに往時と現代
の漁獲高の差は、東シナ海で中国や韓国漁船による船底曳網漁業での
タチウオなどの乱獲によるものである。東シナ海のタチウオが日本近

海に寄る前に諸外国にタチウオの水揚げをされている。日本でも多くの水揚げがあったが、右の問題もあり、単に魚影の問題だけでは済まされなと思う。

4 「タチウオ」の一本釣り

一億年前以前にヨーロッパ大陸に足を踏み入れた先人は、洞窟の石にマグロの絵を刻んだ。魚を捕る原初的な方法としてウケがある。ウケは日本だけではなく諸外国でも見受けられる。それでも三千年前に作られている。ウケは木と蔓により編んでいく、ウケは浅瀬で使用する。何故浅瀬で使うのか。水中に向けてウケを被せる。そこに魚がいなければ、またウケを水中に被せる。魚がウケの中に入るまで続けられる。このような道具を使用してタチウオをとることはできない。釣針や網の登場を待たなければならなかった。

また直良信夫の『釣針^(註)』には、デンマークの首都コペンハーゲンのあるジールランド島から出土した釣針について書かれている。北ヨーロッパの中石器時代のはじめのマグレモージアンの文化は、今から八千年も前のことであつたらしい。この釣針に竿を使用していたかどうかは、まだわかっていない。同書をまとめると次のようなことである。日本の新石器時代の遺跡の中には、大形の釣針を使ってイルカ類を釣り上げ、最後のとどめにモリを打って採捕していた例が見つかった。日本最古の釣針は、神奈川県横須賀市夏島貝塚は、日本でも最も

古い時期の縄文式文化遺跡の一つで、貝塚の下層から夏島2式土器と共に発掘された釣針は小形で立派な製品で、先にあぐがなく、軸の外側の三つのくびれによって糸のはずれを防止している。頭部のかえしの部分は少しとがっている。釣針の制作は、削り取ることによって概形をつくり、それから仕上げにとりかかった。同じ貝塚の田戸下層式の土器の出た層から形の大きな鹿の角製釣針の残片が発掘された。大体丸型のように思われるが、軸の先端に接して内側に一個のくびれがあり、これがかえし形成の役をつとめていたらしい。同貝塚の田戸上層式の貝層からは、きわめて精巧な小形釣針が発掘された。これは、現在の角型のシツリ型に近似した全相をもち、かえしはスリコミ式で、頭部の下方外側に二個のかすかなくびれが付され、さきのあぐの初期的な突起さえつくられている。縄文式文化期の前期には、釣針がやや大きく作られ、軸のかえしの部分が円頭もしくはそれに近い状態で、糸の緊縛が頑丈になっていく傾向が認められる。これは大きな魚を釣る必要からではないだろうか。中期（今から四、五〇〇年前）になると釣針が普及されていくが、後期・晩期の多彩な釣針とくらべて少ない。

縄文文化期も中期にかぎると、海に対する理解が深まり沿岸漁業も含めて沖合にも舟を出すようになった。

日本の古墳時代に岡山市沢田の金蔵山古墳（丘陵の上に営まれた古墳時代中期の前方後円墳）からは遺物と共に鉄製の釣針や、モリや、ヤスのような漁具類が発見された。

金属器時代になっても、金属製のものと骨角製の大形の釣針が、この時代でも使用されていた。釣針の出現は、いまから約一万年前であつた。その起源がヨーロッパの平原地帯であつたことは、遺物の分布状態から事実と考えてよいだろう。時代をおつて文化の進むにつれ、東に、西に、南へとひろまつていった。その拡散分播のもつともさかんであつたのは、新石器時代から初期金属器時代にかけての頃であつた。

現在の釣針は先が鋭く尖つていて、魚類の体にさわつただけでも突き刺さり捕獲の確立性が高い。骨角製の釣針は先が鋭いといつてもたかがしれている。よくもあのような釣針で魚がつれたものだ。

縄文式文化期の人びとに採捕された魚類として百一種類の魚の名前が上がつている。その中にはタチウオも入っている。興味深いのは、マハタ・カサゴ・メバル・オニオコゼ・オニカサゴなどの根魚やキス・コチ・ヒラメ・マガレイ・イシガレイ・マハゼのように砂地に生息している魚にネコザメ・ホシザメ・ヨシキリザメ・アオザメのサメ類もいれば、カツオ・マグロ・ブリのように回遊魚で強烈な引きが特徴な魚もいる。マイワシ・カタクチイワシ・マアジのような回遊魚、さらにサケ・ウグイ・ニゴイ・コイ・フナなどの河川に棲む魚とその範囲は広い。

縄文時代の遺跡から魚の骨などを収集したデータを元に縄文人が食した魚を復元している。

つまり、直良信夫の『釣針』⁽³⁵⁾には、縄文時代の日本の釣針について

説明がなされ、木・骨・骨角・鉄などの材質を加工し、湖・川・海に棲む魚や魚の大小により魚の特徴を把握した上で釣針を制作していたことが記されている。その数量に圧倒される。明治期に日本で開かれた国内博覧会に釣針が出品された。その数は四千種類もあつたらしい。日本の川・池・海に適した釣針を作つた。釣りには六物(へろくもの)といわれる釣針・釣糸・釣り竿・エサ・おもり・浮きの六種がないと魚を釣ることが出来ない。確かにこの六種があると浮き釣り、脈釣り、手釣りなどではできる。しかし、いまではジギングと呼ばれるジグの出現で釣り方が変わった。エサは付けず針とおもりが一緒になつたジグを釣り糸に結合し、さまざまなテクニクを駆使して魚を釣っている。

タチウオはエサの関係からいつても日本の沿岸で捕れるが、とりわけ好漁場の瀬戸内海に多くいる。民俗学者の宮本常一は生まれが周防大島で、勿論、この島でも釣り針が作られるときにタチウオ漁が行われていて、幼少の頃よりの見聞がある。

漁業一般の認識を展開すると、一本釣漁は近世に入つて発展した。昼漁の村も少なくなつた。この中には一本釣を主業とするものが多い。古くからその中心であつたのは、紀伊水道沿岸の漁村だつた。大型魚の消費地としての尼崎・堺などがあり、その後背地に京都・奈良があつた。近世になり大阪の発展に伴い、大阪も魚の大きな消費地であつた。そのため、紀伊雑賀崎・加太・淡路由良・福良・阿波堂ノ浦などの釣浦が発達した。これらの漁村の特色は、いずれも潮流が速

く、網漁も延縄も適しない。一本釣だけが適している。ところが一本釣をするにはエサ・釣針・釣糸の良品が手に入りにくい。釣りあげた魚が高価で取引されなくては、漁獲高が少なからず漁魚として成立しない。

船の胴の底に穴を開けて海水が入るようにして、そこに魚を活けて運搬する、生ケ船の出現をみた。真鍋島の史料では寛文五年（一六六五）和泉国大津の者が生鯛積みに出かけているが、後には地元の方が生ケ船を持ち、少し大きな釣浦には生ケ船を持つ運搬業者が存在した。

漁業技術の進歩、漁場の発見により、一本釣釣浦を発展させていく。漁業技術の発展に大きく貢献したのは天然テグスの伝来である。諸説あるが、もともと信用できるのは、宮本常一の次の指摘である。

中国の広東・広西・海南島などに多い楓蚕の腺液でつくられたもので、楓蚕をとって腹をさき、腺液を出して醋酸の中につけておいてゆるやかに引き延ばしたもので、五尺あまりの糸になる。この天然テグスが一本釣漁の釣糸として利用されたのは貞享・元禄の頃（一六八四—一七〇四）とみられている。当初は薬品問屋で扱っていたが、正徳四年（一七一四）大阪にテグス問屋が出現し、それを行商人が売りさばいた。更に東日本へ行商したのが越前黒目村の人々であった。内海より九州へ売り捌いたのが阿波堂浦の一本釣漁民であった。堂浦の漁民は丸木船で内海の漁場を見つけてテグスを売っていた。⁽³⁶⁾

東京ではどのような仕掛けを使用していたのだろうか。

『新約百科』⁽³⁸⁾に東京湾口のタチウオ釣りとの説明が付されている。

釣法は両天秤の釣り、道糸は、麻糸渋染手撚り径一耗位のもの七十尋から百二十尋。両天秤は、鉄線八ゴメートル、鉛または鑄鉄百三十号から百六十号。鉤は角型軸長十二号位。エサはドジョウがもつとも良いがマアジやイワシ、サバ等が手ごろで、絶えず片肘だけを上下する。現在の大坂近傍のタチウオ釣りは、仕掛けは一つで冷凍イワシのエサをタチウオテンヤにくくり付け、しゃくって釣る。

この本が書かれた昭和三十年代はこの仕掛けが主流だったのか。

二〇一四年六月十八日のネットを見ると、焼津港から出船する遊漁船の快弘丸⁽³⁹⁾、この船の船長のブログに「古き良き両天秤」がある。両天秤を使用して、船長はタチウオ漁一筋でやってきたらしい。「独特な誘い方で微妙にタコベイトの仕掛けを操作して浮力を変えている」このようなコメントがあった。

二〇一三年一月二十七日の、富山県遠征！太刀魚釣りレポート⁽⁴⁰⁾「このたび、日頃親しくお付き合いをさせていただいている富山県の水橋フィッシャリーナ様より、富山の冬の風物詩とも言える「太刀魚釣り」のお誘いがあり、昨日二十六日(火)に利用者の皆様と共におとなりの富山県へと遠征して参りました。富山のタチウオ釣りの仕掛けは独特で、「両天秤」（またはY字天秤）といわれる非常に珍しい（少なくとも新潟県では）片腕六十センチ程の大型天秤の両端に、一・五〜三メートル程度のハリ

ス長の一本針仕掛けを使います。エサはというと、これまた珍しいコノシロの切り身を使います。使ってみて思いましたが、コノシロは皮が固くてエサ持ちも良く、タチウオの激しい攻撃にもかなり持ちこたえてくれる優秀なエサでした。」

両天秤は現地でしか売っていないため、現地のスタッフの方に頼んで準備していただきました。

江戸時代の浮世絵には両天秤の仕掛けで魚を釣る図がある。

『浮世絵つり百景』には、貞 泉蝶「穂葉の杜若」文政七年（一八二七）左手の仕掛けに両天秤がある。⁽⁴¹⁾

三代歌川豊国「百人一首絵抄参議」弘化元年（一八四四）両天秤の片方に釣り上げた魚に針がかりし、その下にもう片方の空の針が描かれている。⁽⁴²⁾

『浮世絵一竿百趣』に納められている「水中魚論 丘釣話」江戸戯作者岡山鳥、画師錦亭鳴虫、文政二年（一八一九）木版の絵草紙で釣りの書物、「水中之」に二匹の魚がいる中、左手に両天秤が描きこまれている。

しかし、そこにはメバルやガシラなどの根魚が中心でタチウオを釣る仕掛けの両天秤ではない。浮世絵を見る限り沖釣りをしている風景は少ない。多くは、土手沿い、中州や海岸周辺の丘釣りが中心で気軽に竿を出して楽しんでいる。小舟に乗っても三〜四人が竿を出して魚を釣る姿がある。とはいえタチウオ釣りの両天秤の使用例は少ないが残存している。「鹿児島県伝統漁具漁法集」⁽⁴³⁾は平成三年（一九九一）

三月に給良郡隼人町浜市の錦江漁協で昭和五十一年（一九七六）に大分県国東町の曳釣業者を講師に招聘した。それまで行われていた伝統的なタチウオ漁から脱するためであった。

曳釣漁法以前の当地区では一本釣りにより漁獲されていた。タチウオ一本釣りは船竿釣りで一艘当たり四本から八本の竿を出し、釣り先は両天秤仕掛けで、一日あたりの漁獲量は十キログラムから二十キログラムが限度であった。同書中のタチウオ一本釣りの絵では、中央部に四十刃の錘が下がり、ヤジロベエのように左右に広がり、広がった先端部分から針先まで二〜三ヒロとしている。先端部分からテグスが伸びて、その先にワイヤーがあり、そこからタチ針がある。餌はカタクチイワシとしている。道具が底に着いてから一ヒロ位上げて釣るのが基本である。

タチウオ釣りは、冬の日本列島の気象と同様に西高東低である。古くから関西から西日本方面が盛んで、進んだ釣り具、釣技が開発されてきた。関東では東京湾が主なフィールドで、昭和二十年代までは第三海堡から横須賀市観音崎沖へんけ、主として職漁家が天秤仕掛けで釣っていた。が、その後衰退し、昭和五十年代後半になって復調、現在に至っている。仕掛けは、天秤二本バリ仕掛けが標準だ。東京湾では往時と同様に天秤二本バリが続けられていることが判明した。浮世絵で見た両天秤の絵は、天秤二本バリ仕掛けの意味だった。ただ浮世絵を見る限りタチウオ釣りとは無縁だと思われる。浮世絵での船釣りは、近景が多く、キスにハゼ、小さな根周りでガシラ・メバル・小

鯛・アイナメ・ベラ・チヌやカレイ等が釣れた。『日本釣漁法全書』⁽⁴⁶⁾を書いた著者の久徳外雄は、中村利吉の校閲を経て出版した。中村利吉は、みすや針店を経営しながら『日本水産採捕誌』⁽⁴⁷⁾『釣鉤図譜』⁽⁴⁸⁾を出版しているが、久徳の考えは次の通りである。

刀魚漁―竿釣手釣あり竿釣は竿長四尺乃至六七尺迄にして大きき「コカシ」糸に渋を引きたるものを縋綸とし其の長さ二丈より三丈に至る其末端に真鍮の細線を繋ぎ之に大小二個なる鉤を付し其糸と真鍮線との界に鉛錘の角形のものをつけるものなり今漁場に至るに四個を携へ漁船に乗り組み船の舷に釘を打ち付け釣竿を止め鉤を海中に投ず

餌は鰯及び「あなご」若くは諸魚の皮にして此を小鉤の方に刺し細き銅線を以て之を巻き付け以て月夜若くは暗夜に際すれば暁朝及び薄暮に鉤業するなり 季節は初秋より初冬の中旬迄とす手釣は綸長百尋余其末に竹製の天秤を付し方言其器を「うだ」と称す

両端に各糸の長さ一尋許を垂れ此れに鉤を付け天秤の岐下に錘石一個にして百四十目なるものを垂れ海深八十尋の処に至り是れを用ゆ漁期は三月より十月頃を最良とす

校閲をした中村利吉の考えを示すものとして以下のものがある。

『日本水産採捕誌』⁽⁴⁹⁾は農商務省水産局が編者になり、まとめられた。そのタチウオ釣りの項には、詳細な説明がついている。

タチウオは東北海に少なくして西南海に多く就中瀬戸内海に於て

饒し多くは手釣にして殊に安芸国の漁者巧手の称あり因て之を記す。安芸国に於ける太刀魚釣漁業の季節は十月十一月の交にして昼間の業とす此魚の性常に海水深き処に棲むものなるが故に其処を卜して釣を為す。漁具は縋絲は麻絲製長さ六十五尋の先きに真鍮線凡そ半尋を接続し其端に重量三十匁の鉛の沈子と俱に一小鉤を付く此の小鉤に餌を装するものなるが故に之を餌懸鉤と云ふ而して其下に大四番の鉄線を長さ七寸五分に切り其内一寸五分を勾曲して鉤となしたるもの四本を麻絲にて結束し錨状に為し其麻絲の上を真鍮線にて巻き詰めたるものを付く斯く真鍮線を巻き及び、縋絲にも之を繋ぐものは此魚歯の鋭利なるが故に其嚙み切らるるを防がんが為なり餌はアナゴの小さきものを用ふ。漁法は漁船一艘に漁夫一人若くは二人乗にて漁場に至り一人一具を使用す先づ小鉤に餌魚の全身を装し満潮の時を待て船頭に立ち鉤を垂れて絶えず縋絲を伸縮し魚の餌に触るるを覚ゆるときは迅速に縋絲を引きて魚体を大鉤に罹らしめ直に引揚げ捕獲するなり。又一法は縋絲は麻絲製長八尋乃至十尋とし其の端に重重三十匁の石の錘を付け是に長さ一尺の割竹を繋ぎ又先きに長さ一尺の銅線を接続し是に大四番の鉄線にて作りたる鉤を付く而して一船一人乗にて二具を使用す餌は「ギザミ」の肉を截切して釣鉤に装し潮勢及び其干満に拘はらず船を進行しつつ釣を垂る然れども其時刻は東天既に明けて未だ旭紅を仰がざる前と夕日全く没して仍ほ余光の未だ滅せざる中に於て使用するものにして此の機を失へば更に捕獲

の利なしと云ふ漁業の季節は前者と同じく十月十一月の交とす

また、『日本釣漁法全書』⁽⁵⁰⁾には、手釣りの仕掛けとして、百尋ほどの糸先に竹製のテンピン付ける。

方言で「うだ」と呼ばれている。竹の両端に長さ一尋ほどに鉤を付ける。天秤の下に糸を垂れ、百四十目の錘石を付ける。この仕掛けは東京湾の両天秤に似ている。竿釣りは、竿の長さが七、二メートルから十二、六メートルの長竿を使用する。延竿が鮎竿のような竿で、自然と弾力性がある。これに「コカシ」糸に渋を引いた糸の長さが二丈から三丈ある。この末端に真鍮の細線を繋ぐ、そこから大小二個の鉤を付ける。糸と真鍮線との間に角型の鉛錘を付ける。

『日本水産捕採誌』⁽⁵¹⁾のタチウオの仕掛けは六十五尋の麻系の先に半尋の真鍮線を繋ぎ、そこに三十刃の錘に小鉤を付ける。この小鉤に餌のアナゴを付ける。これは別名餌懸鉤という。その錘の下に大四番の鉄線の長さ約二十三センチに切り、そこから約四、五センチを曲げて鉤とする。四本を麻系でくくり錨状にする。その麻系を上真鍮線に巻き付ける。釣法としては絶えず上下に動かす。もう一つは、長さ八尋から十尋の麻系の先に三十刃の石の錘を付けた三十センチの割竹を付け、竹の先に三十センチの銅線を接続する、ここに大四番の鉄線で作った鉤を付ける。餌はギザミの肉を切り、鉤に付ける。

このような方法で小舟に一人で二具を使用してどれほどの釣果があったか不明だが、漁具の絵とともに掲載されている説明文には、鹿児島県の漁法に似ていて漁師としては、大きな釣果はなかったと記さ

れている。現在は、タチウオテンヤが多く、エサ釣りは少ない。タチウオテンヤに限定すれば、釣法に大きな変化はないが、テクニクが豊富である。

『周防大島を中心としたる海的生活誌』⁽⁵²⁾に紹介されているタチウオ仕掛けは『日本釣漁法全書』⁽⁵³⁾の竿釣りの仕掛けと似ている。道系から錘の鉄板があり、その下に小さな鉤が付いていて、ここに餌のギザミを付ける。鉄板の下の方あたりから二本力ケヅリのような二本バリになつてゐる。タチウオも九月になると食う。タチウオはたいていマジメ（日の入）の少時を釣るもので二本力ケヅリである。これに、ギザミ、ハデ（ハゼ）などをつけて釣る。まことに勇壮なもので、三尺も四尺もあるのを釣りあげて生け間に入れる時の気持は何とも形容がでない。青黒い海を、ほの白く、流星のように流れ行く魚。だがしかし下手をするとき背鰭で手をきる。

『技術と民俗』⁽⁵⁴⁾には、周防大島の近辺にある沖家室島における釣針の制作が書かれている。

山口県大島郡東和町の沖家室島には、今日では二軒の釣針製造業者（沖家室島では釣屋と呼ぶ）がいるだけであるが、第二次世界大戦前までは、常時五、六軒の釣屋があり、大島郡内唯一の釣針生産地として知られていた。ことに、同島が瀬戸内有数の一本釣り漁村であったことから、タイ・アジ・ハマチ用などの手打ちの一本釣針は優秀で、郡内をはじめ、県内外の釣漁民にカム口針の通称で愛用されていた。しかし、沖家室島の釣針が知られてくるのは、釣針製造の先進地、土

佐（高知県）・阿波堂浦（徳島県鳴門市瀬戸町）・播州（兵庫県西南部）などから何名かの釣針職人が来島し、釣針の製造販売を行うようになる明治末～大正初期ごろからのことで、そう古くはない。元来、同島では、釣針は漁民が休漁期に自製して用いていたが、専門の釣針職人の制作する釣針の品質がすぐれていたことから、徐々に漁民の自製も止まり、釣針製造は、専門職人の手によって行われるようになった。

5 テンヤとカブラ

『なんでもわかる沖釣りの全知識』⁽³⁵⁾によると、テンヤについて「テナヤオモリは本来がハリと一体になるオモリで、ハリとオモリを固定するのが普通だが、あいだにハリスを入れて固定する場合もある」とある。オモリだけの大きさでは一号から十五号ぐらいまでが普通で、特殊向きにはもっと大きいものもある。ハリにつけたエサの姿勢の安定保持と人の操作によるエサの運動を直接的にするのがおもな特徴であると記す。また、カブラの説明は、普通のテナヤオモリとすべて同じだが、沈みがやや速いのと潮流の速い釣り場に強い性能をもっている。大きさは八号ぐらいから二十号ぐらいまでである。ここでは一般的な説明しかなされていない。「明治前日本漁業技術史」⁽³⁶⁾にはテンヤとカブラの区別はしていないが、鉤錘竿釣の一項がある。鉤錘の萌芽的事例は鉤の項に後述している様に享保の「何羨録」⁽³⁷⁾を見ても、その運

用に就ては天保の「釣客伝」に「生表平澳の釣方（中略）錘中へ針鉄鑄込（中略）針は狐形とし二分位、手釣の外はね竿遣ふべし。徳なり。」とあるのが恐らく初見である。鉤錘竿釣の代表的なものとしては東京湾クロダイのシャクリ釣りを挙げる。丸節女竹五尺位の竿、穂先はクジラのヒゲが多い。竿の手元近くに糸巻があり、道糸は竿を伝い伸縮輻施する。鉤錘の外に錘はない。この鉤錘を東京方面でテンヤ関西でカブラなどと云う。「明治前日本漁業技術史」から引用したが、同内容の著述は『澁澤敬三著作集』⁽³⁷⁾第二巻に所収されていた。この本には鉤錘の図が掲載されていて、錘の部分の形状が異なり、摂津は錘が球体で上に糸を結ぶように針金が鑄込んである。泉州の錘は台形で、その上には摂津と同じく針金が鑄込んである。私自身は昭和四十年代後半から五十年代頃に、スーパーなどの釣具屋に球体の仕掛けが売られていたのを使っていた。自然に球体の仕掛けを使用していた。愛媛県や和歌山県の御坊あたりでも同様の仕掛けを使用していた。因みに『釣針図譜』⁽³⁸⁾にもタチウオ釣りの仕掛けがいくつか紹介されている。泉州と摂津は『澁澤敬三著作集』の図と同様である。紀州有田郡では、長い針の上部に道糸を通す輪があり、その下に竹のわっかを嵌めて魚の皮が下がっている。形状は地域により変化があるが、針の上部に道糸を括り、針にエサを付けているのは、薩摩、肥後宇土郡、紀州西牟婁郡、備中小田郡などで、変わっているのは備後御調郡で摂津の仕掛けが球体になっているのに対し楕円球、その上に道糸を通す針金の輪がある。楕円球のすぐ下の針金部分に輪っかがあり、そ

ここに更に長い針金があり、針の部分は三本の錨状になっている。

針から進化した鉤、それに錘を付けた意図を紐解く『なんでもわかる沖釣りの全知識⁽⁵⁹⁾』の中にテンヤとカブラの説明ではカブラもテンヤも同じだと言っている。

『明治前日本漁業技術史⁽⁶⁰⁾』改訂版では、この鉤錘を東京方面ではテンヤといい、関西ではカブラなどと云うとある。

タチウオの引っかけ針は誰が考えたか

明治期にはタチウオの引っかけ針の図があり、明治以前、江戸時代にはタチウオのテンヤ引っかけ釣りが存在したと思う。残念だが現在証明する現物はない。明治になり突然出現したとは考えにくい。明治時代は、江戸時代の釣りスタイルを踏襲している。現今では足場のよい一文字や港湾から投げて引き釣りをたのしめるが、往時はケミホタルもなくもっぱら朝か昼間の釣りであるのは想像できる。小さな船に乗り、テグスを下ろした針には鯖か鰯のエサで釣りあげた。天秤はその証でもある。引っかけの針は時代がくだつての事と推察する。

明治二十年頃、中村利吉により編纂された『釣針図譜⁽⁶¹⁾』には、タチウオテンヤの図がある。紀州有田郡では、竹の上にテグスを通すようになっている。チモトに竹を使用して、そこから針の長さの魚ノ皮が二枚あり、その横に針がある。針には返しがない。大阪では、昭和六十年頃にはなじみのデザインで、鉛の球に針金が伸び先は引っかけるように曲がり、返しもある。泉州の形は摂津と似ているが、鉛の球の

形が違い、台形のような形になっている。備後御調郡は、楕円の鉛から引っかけ針があり（返しがある）、鉛の下の引っかけ針の元に輪っかがある。そこから下に長い針金が伸び、下は三本のいかり状で引っかける。

明治になり水産伝習所ができ、古来からの漁業を体系的にまとめた。タチウオの釣り針が掲載されていた。この釣法を考えたのは大したものである。食べる魚の中央部を咬めることを発見、否想像してこの引っかけ針を考案した人は、魚の生態も経験知から知りえた可能性が高い。

室町時代からタチウオの名前が知られ、江戸時代の料理書にタチウオ料理が紹介されているし、食べられている。タチウオを捕獲するなり釣り上げる針の考案は、大きな問題である。疑念は増幅するばかりである。

そこでタチウオの仕掛けを製造販売している二つのメーカーにメールで問い合わせた。

株式会社ハヤブサ⁽⁶²⁾には二〇一四年十月二十三日に問い合わせた。質問は左記の通り。

タチウオテンヤについて

御社ではいつ頃タチウオテンヤを発売されたのですか

また、タチウオテンヤを最初に販売したのはどのメーカーでしょうか。

タチウオテンヤに興味があり質問させていただきました。宜しく

お願いします。

この質問にすぐに返答していただいた。二〇一四年十月二十三日付
ハヤブサお客様係からの返事を掲載する。

平素より弊社製品をご愛用頂き誠にありがとうございます。また、この度は貴重なご意見を賜り厚くお礼申し上げます。太刀魚テンヤにつきまして、頂いた内容を拝読させて頂きました。弊社の太刀魚テンヤですが、記録に残っている商品になりますと二〇〇〇年に「船のりり太刀魚テンヤ」を発売したのが最初であるかと存じます。その後何度かモデルチェンジをさせて頂き現在のSW403に至っております。最初に太刀魚テンヤを発売したメーカー様ですが、大変申し訳ございませんが弊社では分かりかねます。今、小田様にお伝えできる事は弊社が最初に太刀魚テンヤを販売していないことは確かでございます。

後日、違うメーカーに問い合わせをした。両メーカーの太刀魚テンヤを使用していたこともあり、近親感を持っていた為かも知れない。株式会社ヤマシタお客様窓口⁽⁶⁾に二〇一四年十月二十九日にメールにて相談ののつてもらうことにした。

問い合わせ、御社ではタチウオテンヤは何時頃販売されたのでしょうか。

また、日本で最初に販売したメーカーはどこでしょうか。タチウオテンヤに興味を持っています。

ヤマシタお客様窓口担当の方から二〇一四年十一月十二日に待ちに

待ったメールが届いた。丁寧な返事だった。

弊社のタチウオテンヤの発売時期については、正確な記録が残っておらず不明です。現在弊社で「超発光タチ魚針（又は仕掛）平型・丸型」として販売しているものは、主に波止からのタチウオ釣りに使用されていますが、元来このタイプのテンヤ針は瀬戸内海の豊島でタチウオ漁の漁師さんが使用していたのが発祥と言われております。ですから、この釣りが現在も行われている瀬戸内あたりで、手作りされていたのが始まりでないかと思われます。

一方、弊社の「超発光タチ魚仕掛船用（304050号）」のタイプは歴史が浅く、弊社が「発光タチ魚仕掛魚シL（30号）」として発売したのが一九九六年、メーカー品では九州のD社がそれ以前から販売しておりました。

こちらもそれ以前に漁師さんが手作りしていた物が始まりではないでしょうか？ いずれにしましても、このタチウオテンヤという仕掛けは、餌に噛み付くタチウオ針にかけるのに、最も理にかなった物である事は間違いないと思います。

6 ジギングの登場

鉤錘が進化してジグの登場がある。金属製の重イルアーで、ヒラメなどの底魚をねらう。狙う魚は青物・タイやタチウオなど種類は多い。

積極的に魚に対してアピールを行う。そのためリールを巻きながら竿を操作するので、疲労は高まるが技術の釣りといっても過言ではない。魚を釣り上げたときの喜びは達成感に満たされている。

『海釣り大事典』⁽⁶⁴⁾の中で服部善郎は、タチウオ釣りについて、一九九八年には陸釣り餌のサフトローリング、船釣りではエサ釣りとカッタクリ釣り、ジギングやトローリングなどがある。この頃のジギングは、言葉として初期の頃だと思う。

タチウオ釣りにかなった釣りである。竿の改良、ジグの種類の多様さ、ジグと呼ばれる疑似餌をジャークというジグの動きでアジ・イワシ・サバなどに似せて小魚を捕食する青物をフッキングさせる釣り方である。近年は青物以外にもメバル・ガシラなどの磯にいる魚、イカやタチウオ等、釣る対象魚は広がっている。『海のルアー基礎講座』⁽⁶⁵⁾でジギングの定義を確認しておく。

メタルジグを使って大小様々なターゲットを狙い撃ちにするジギングは、入門にも最適なソルトゲームの基本形だ。釣り方もいたってシンプル。基本的にはジグを沈めてしゃくる、ただそれだけ。しかしその中には工夫すべきことが山ほどあり、いくらやっても飽きることがない。リズミカルにしゃくるロッドが突然止まり、強い引きに変わる瞬間はこの釣りのクライマックス。まして食い渋る魚を自分なりの誘いでヒットさせた時などは、この上ない快感を覚えてしまう。

それではジギングは何時頃始まったのだろうか、次のウェブを参照

した。

www.interq.or.jp/boss/uminchu/history.html ⁽⁶⁶⁾

二〇〇一年五月十八日、茂木陽一氏の指摘では、ソルトウォーターゲームフィッシングマガジンが一九九四年二月に創刊号を世に送り出した、とある。どうしてジギングがタチウオの釣りにむいているのか、『iregu』⁽⁶⁷⁾によると、ジグの軽重・長短・色彩・形状など狙う魚により専門化されているが、タチウオの場合も同様で各メーカーから様々な規格品が出ている。この本には、びっくりするような製品が紹介されている。驚くのは、どの製品を使用しても釣果を期待できるのである。

ここでは船釣り、防波堤からの引き釣り、ふかせ釣りなど各種のタチウオ釣りに対応している製品を紹介する。

このマナティは何だ このZZヘッドは一体!?

ボトムワインド専用のマナティを専用のZZヘッドに装着して使用、ワインド釣法である。

太刀魚ゲッターびりびり 太刀魚ゲッターツイン噛む

太刀魚ゲッターのヘッド上部に引くだけで振動が起こるびりびり板を装着して、その振動と水流抵抗を利用してルアー的なアクションと、ゆっくりした上下の動きに対応する。太刀魚ゲッターツイン噛むの特徴はヘッド下にアシストフックを装着し、小型メインの夏タチシーズンやハイシーズンでも食い渋りのフッキング率の向上を目指した。

S-Vトーチ 背中にあるケミホルダーに後方から簡単にケミホルタル25をセットできるボディ下部中央、フックとフックのあいだにあるアイにブレードを装着すれば、アピール力を高められる。

スナップラップ 波止でも船でも真下に垂らして竿先を動かすと、独特の8の字アクションをするバーチカルメインで使うルアー。投げて巻いて左右ダートの部分を進化させた。

LEDルアー ハピソンからLEDと小型のピン型リチウム電池で発光するバイブレーションプラグが発売された。

グリーブ 20グラムのソルトウオーター用のスプーン

ソルト用ストリーマ タチウオ釣りで使用するフライは、小魚に似せた非常に大きいものでストリーマと呼ばれる。

タチエギ タチウオがかればダブルフックがストッパーから外れる仕組み、パッケージ内には小さなウミホタル25が同封されている。

ベイスクウィッド イカベイトはワームにくらべてシルエットがはつきりしており、スカート部ビラビラのアピール力が高く、ダート時の動きも機敏だという。ただラバー素材なのでタチウオの歯による破損が気になる。

ハードコアフィニールダート90 タチウオの歯でも壊れない。

このルアーがもたらすダートアクションはリアクションバイトを誘発させる動きでフィッシャーの捕食スイッチを入れ

る。また、水深のある場所での使用が好ましい。

パニックベイトタチ魚 餌のアピール力を高めるために針上に派手なタコベイトを付けることでサンマなどの切り身を生きた小魚に見せる工夫。

セラバイブレーション82 S太刀魚カラー 重さ17グラム、飛距離を出すためにバイブとして非常に重い、夜光カラーである。

パワーダートヘッド 30グラムもあり、遠投がきき、深いポイントが攻める。カラーも三色ある。

この説明では実感はないが、これだけ多種多様な仕掛けがあれば、初心者・ベテランにかかわらず楽しい時間を過ごせそうだ。

7 生類憐みの頃の釣り風俗

遊びとしての殺生禁止は江戸市中では魚にも及んだ。⁽⁶⁸⁾元禄六年八月、釣りを無益の殺生として、町奉行に釣船を出したら召捕えるように指示し(『御当家令状』、宝永二年九月には漁師のほか釣船や網で魚を捕るのは以前から禁止している。違反者の摘発を江戸町中に触れた(『正宝事録』)。右の話は江戸町触れに出てきている。生類憐みについて、根崎光男は「網吉の個人的資質と密接にかかわっていた」と考えていた。そのいきさつを引用する。

貞享四年二月二七日、鳥魚貝の食用売買禁止

『生類憐みの世界』⁽⁶⁹⁾での根崎光男の見解は、網吉の側から光をあてて

いる。

御側衆は將軍の側近として身近に仕えた者たちだが、かれらは鮭・鱒・鮎を除いた魚貝の調理禁止品目について一つひとつ名前をあげて指示されていた。それだけ、綱吉は側近の者たちの魚貝類を食べることによる穢れを忌み嫌い、かれらに清廉さや潔癖性を求めていたということであろう。(中略)「生類憐み」それ自体が綱吉の個人的資質と密接にかかわっていたと考えざるをえない証左ともなろう。このように、鳥や魚介類の調理規制は、幕府内部でとくにきびしかったものの、しだいに外部へと広がりをみせていった。貞享四年二月二十七日の江戸の町触には、慰みとして魚鳥を飼育することはかまわないが、食べることを目的として飼育してきた魚鳥・亀・貝類を食料としたり、これを売買することを禁止していた。

元禄六年八月十九日には、江戸の奈良屋市右衛門を通じて、漁業を生業とする漁師を除いて、一般町人の慰みとしての魚釣りを禁じる触れを出した。⁽⁷⁾しかし、江戸の町では釣りがやまなばかりか、まだ釣り船もあるとして、宝永二年(一七〇五)九月七日の町触れでも、網で魚を取るとともに、あらためて魚釣りを禁止した(同四〇六四)。

『江戸町触集成』⁽⁷⁾三四九五を見ると、魚類のすべてを食べることが禁止されていない、魚釣りや生きてる魚鳥を殺して食することを禁止していた。

『江戸町触集成』⁽⁷²⁾から魚に関係する生類憐みを拾い上げると左記の

七触れがある。重要な触れは、二九五六と四〇六四で、塚本字が『徳川綱吉』⁽⁷³⁾の中で引用している『御当家令状』五〇〇、元禄六年酉八月十七日は、江戸町触二九五六と文言は異なるが内容は同じである。さらに宝永二年九月の『正宝事録』は、江戸町触れの四〇六四と内容は同じである。

『摘録鸚鵡籠中記』⁽⁷⁴⁾を書いた朝日重章の場合は、遊び好きであるが生類憐みの頃はどのようにしていたのだろうか。釣りに関する記述を引く。

元禄五年六月 味碗に魚釣に行く、(後略)

元禄五年八月十二日、この日左分源太左衛門同寄人を誘引して勢海に浮かぶ。

元禄五年十一月十日 昔日仲間と江戸へ下りし新井の渡にて船に乗り、仲間の羅紗のきせる入れを手持ち多葉粉のまんとし、前後を見れば大鯰跳りはね、そのほか無数の魚どもびちびちと飛び揚がるを見て、(後略)

元禄七年七月二十七日 親癪吐逆。予相原萩石と南野へ鯪打ちに行く。

元禄七年九月二日(前略) 予唐網を打つ。鮠を取る。日暮に帰宅。

元禄八年五月二十八日(前略) 巳刻過ぎ、予、加藤平左衛門と云い合わせ、味鏡へ魚釣りに行く躰をして、へんてつと釣り竿を持たせて行く。

元禄八年九月二日（前略）余が御足輕を遣わし唐網をうたすべし。また別船をも借し遣わすべき間出船し給えというに依りて、元禄十年六月二十七日、江戸御やしきの犬を船にて廻し、今日町中へ放つ。

実にのんきなものである。元禄五年十一月、江戸に行った折にも釣りをしている。見つからなければいいと思っているのか。そうかと思えば、屋敷で飼っていた犬を町中へ放っている。

朝日重章は生類憐みの御制禁の頃何十回も釣りに出かけたが運よく咎められたことはなかった。『武野俗談』にある「窓のすさみ追加」の話も興味深い。

宝永の末頃、まだ殺生制禁の頃に、御歩行組頭愛久津彌太夫は同僚と釣りをしていた。そのことがばれて、役所に行き、質問を受けた。同僚は釣りをしていないといひはり、彌太夫は最初より釣りをしていた、と述べた。なぜ釣りに行ったのかは、御制禁とは知りながら、若い頃より釣りが好きで、老後になっても止めることが出来なかった。公務の間は釣りばかりしていて、楽しい暮らした。御制禁の世の中に釣針をどこで求めたか、この質問に悪びれる事なく、自分で作った、と答えた。問答が終わると、あがりやへ入れられた。時間が経過して、綱吉が薨去した宝永六年以降御制禁が解かれ、二人とも赦免になった。

江戸町奉行所の役人により作成された『御仕置裁許帳』⁽⁷⁶⁾の実例を見る。

元禄二年巳四月十二日 十四年以前（延宝三年）清兵衛他五人で御曲輪の御堀で鯉鮒を捕っていた。銭十貫文で売り三貫ほど分けてもらった。十五年以前（延宝二年）から七八年以前（天和二年—天和三年）仁左衛門と一緒に魚を捕っていたが金銀が少なく、その後は止めた。中根主税に捕らえられて牢舎に入れられた。詮議の結果、巳五月十一日牢屋において死罪になる。

同年巳四月十二日 荒物屋五郎左衛門十七年以前（寛文十一年—寛文十二年）より八九年以前（延宝八年—延宝九年）御堀で唐網にて鯉鮒を捕っていた。商売には使わず、贈り物にしたり、自分で料理をした。やはり、中根主税に捕まり牢舎に入れられた。詮議の結果、巳五月十一日牢屋において死罪になる。

他にもあるが、お堀の魚を捕ることは重罪で、死罪の上獄門になっている。一番の違いは、前の二例は生類憐みの令が出される以前の出来事であったのに対して重罪になったのは、いずれも貞享二年頃、つまり生類憐みの令が出されていた。その為の罪の重さである。

処分を決めた中根主税は、小普請支配に入り、その後、大番から大番組頭、目付へとすすみ、千石を領するまでになった。貞享三年（一六八六）に持弓頭になり、翌四年二月に火付盗賊改となる。

元禄二年（一六八九）一月、中根は吉原の遊女屋主人を博奕の罪状で捕らえ、關所処分にした。その際、遊女三人も没収財とし、入札により三百両で売り渡し、金は幕府の御蔵に納めた。「人売りは天下の大法にふれる」と綱吉の怒りにふれ、同年閏一月八丈島へ遠島になっ

た。十一年後の元禄十三年に御赦免になった。

『江戸町触集成』第二卷⁽⁷⁾

二五五二 覚

為食物、魚鳥いけ置候而売買仕候儀、堅無用二候、にわ鳥龜同前之事

二月廿七日

如此御書付出候上八、自今以後、為食物いけ魚いけ鳥堅売買仕間敷候、但為慰飼鳥飼魚八格別也、鶏亀貝類二いたる迄、為食物一切不可飼置、此旨於相背八可為曲事者也

卯二月

右は二月廿七日御触、町中連判

二五五三

覚

昨日御触二付、只今迄飼置候鳥、俄二しめ殺申者可有之候、為食物いけ置候魚鳥、俄二殺候儀無用二仕へし、若しめ殺候もの有之候八、曲事二可被仰付候、并いけ鳥いけ洲二而無之候共、貝類其外鯉鮒海老などのいきたるを商売不罷り成候間、右之通町中不殘可被相触候、以上

卯二月廿八日

右之通、二月廿八日町々江奈良屋分手代相廻シ被申渡、尤帳面持參、右之趣慥二承届候段、月行事名主判形被取候

右之通町中相触候は、名主月行持印判持、喜多村所江明廿九日可

被參候

二月廿八日

二五六四

覚

(前文省略)

いけすの魚仕置売買無用之事

右之趣堅相守可申、於令違背八可為曲事者也

卯三月町年寄三人

右は卯三月御触

二六六八

覚

一前々も相触候通、いけ魚弥堅仕間敷候事

一屋形舟前々御定之通、尺寸少も大きに仕間敷候、尤定之数之外造申間敷候、并船二艘も三艘も一ツにもやい、致自由候儀堅仕間敷候事

(後文省略)

右之趣可相守、若於相背八急度曲事可申付者也

巳六月十八日

右御触町中連判

生きた鳥魚の商売を禁じているが、何度も触れが出されていることから、法の遵守を訴えている。

二九五六

一西八月十九日奈良屋市右衛門殿江被召呼被仰渡候は、頃日釣船多出候、家業二致候漁人は格別、慰二釣致シ候者向後出候ハ、御捕可被成旨被仰付候間、堅停止二可仕候、前々分生類を憐候様被為仰付候処、頃日八誠相見江申候、自今以後実之心を以憐候様と被仰出候間、町中江此趣急度可申聞旨被仰渡候、就夫名主判形致申候

西八月十九日

四〇六四

覚

一前々より獵師又は網二而魚を取候儀、停止之旨相触候処、頃日猥二釣いたし、并釣船も有之由相聞不届之至候、向後獵師之外魚を釣、網打弥以堅仕間敷候、若此以後相背もの於有之八見合次第召捕、急度曲事二可申付候間、此旨町中不残可相触候、已上

西九月七日

右之通従町御奉行所被仰渡候間、町中人念相触、急度相守可申候、以上

九月七日

右御触町中連判

奈良屋納

『江戸町触集成』第三卷、

四一七二

覚

一獵師之外、釣船又八網二而魚を取候儀停止之旨、前々分相触候所、頃日釣いたし候者有之由相聞、并鳥商売且又鱣鯨商売致間敷旨度々相触候所、右之商売致候族も、今以所々茶屋二而望之者有之候得ハ、鱣鯨料理いたし出シ候由不届二候、此以後、右之商売致候者候ハ、見合次第召捕曲事二申付、其所之家主五人組名主迄可為越度候間、此旨町中急度可相触候、以上

子七月十九日

右は同日御触、町中連判、喜多村納

二九五六、四〇六四、四一七二の触れは一段と厳しい内容になっている。趣味で魚釣りをしたり、網で魚を取ることを強く諫めている。『大阪市史』⁽⁷⁹⁾第三には簡単な触れと達しがなく、詳細な内容は不明である。

触四六五 閏五月五日 生類を商売二致候儀停止之事元禄七年

触四九三 三月魚鳥獸取間敷之事 元禄八年

触五〇八 九月十日殺生之儀且又いけ鳥いけ魚之類商売致間敷之事 元禄九年

触五八六 六月十日殺生又いけ鳥いけ魚商売致間敷之事 元禄十一年

触六四六 八月九日生魚・鱣(筆者注・こいの一様)・どじやう商売停止之事 元禄十三年

達七七二月十八日 (全文略) 生魚生鳥商売致間敷之事 元禄十六年

『京都町触集成 第一巻』⁽⁸⁰⁾

元禄十三年

二五七

覚

惣而いき魚商売之儀最前停止被仰出候、うなき、どぢやう、いき魚之事二而候間、向後商売停止二候、若此以後売候もの有之者可為曲事候、若此以後売候もの有之者可為曲事候、其所之名主五人組迄越度候条、急度可相守候事

右之趣從江戸被仰下候間、洛中洛外可令触知者也

辰八月九日

元禄十六年

三五九

口触

慰として飼鳥飼魚いたし候事、最前も相触候通堅可為停止候、并鳥籠致売買候儀無用之事
右之通洛中洛外江可触知者也

未二月

『大阪市史』も『京都町触集成』もいけ魚に対して商売をしてはいけないとある。遊漁船への取り締まりの触れがない。將軍のお膝元と他地域との温度差であろうか。

8 江戸時代の沖釣り

永田一脩は自著の『江戸時代からの釣り』⁽⁸¹⁾の中で、varietyよく船釣りを取り上げ、江戸時代の船釣りを最初に書いたのは『本朝食鑑』⁽⁸²⁾にある船の描写だと指摘している。「江都り士民・好事家・遊嬉の者等は、扁舟に棹さし、簑笠を擁け、茗酒を載せ、竿を横たえ、綸を垂れ、競つて相釣っている」。きすこの項では「江都の芝浜・品川・中川では七・八月に官客・市人が画船を浮かべ、水嬉をもよおして、争つてこれを釣る。」本朝食鑑は元禄十年の出版だから、この時期に海に向かってきすこを釣る人々の様子がわかる。『類聚近世風俗志』⁽⁸³⁾には、江戸の船遊びは慶長年間に避暑のため浅草川に行くようになり、大名や従臣までも船遊びをするようになったとある。承応年間には盛んになり、明暦の大火後、城築のために船を使用し、その影響で四五年は休業となった。しかし、万治になると盛んになり大船を造る、全部が屋形船になる。宝永三年に船数百艘とある。「何羨録」⁽⁸⁴⁾に寛文年間の白鱈釣りが始まったことを記録し、既に根釣りとなり釣りが行われていた。ここでいう根釣りは海底の根の周辺に付いているハタ、メバル、ソイ、ガシラなどの釣りで、ねり釣りとは、船を動かしながら釣ることである。『嬉遊笑覧』⁽⁸⁵⁾には天保十年頃の貸し船や釣宿の様子が書かれている。

それによると、今田船の如き小舟を多く設けて釣り人に貸している所が多い。百姓の権次が小舟を釣り人に貸す。伝聞により釣り人間に情報が行き渡り、そのため釣り人が多くなった。釣宿は権次が始めた

らしい。時期は天明の未より寛政の初期だという。

黒田五柳の「釣客伝」⁽⁸⁶⁾には、天保末頃に岸からの遠距離の位置で深い所に根があり、釣人は根魚を狙うので鉤を多く持参するのが鉄則である、と記している。

神奈川根釣は四月五月、亦秋十月時節吉、同所船宿竹の橋、西浜釣市今は倅市兵衛、又外に五郎亀と云へる者あり、是等よし。釣方は江戸の釣方、鉤は鯨鉤三四分、鉤は多く用意すべし、海の深サ二十四五尋、錘二十目三十目にて吉。手釣なり。天秤にて吉。

亦是一本鉤にても吉。糸は大丈夫の方吉。此釣は江戸の大釣なり。(中略)尤地方より沖釣場所迄凡三四里なり

根の魚釣りには石に引っかかりたり、海藻にからまって仕掛けを失うことが多い。十分に釣針を用意する。仕掛けは天秤でも一本釣りでもよい。沖合十二キロメートルから十六キロメートルで釣る。

さらに「釣客伝」には、「ここではすでに乗合船もできていて、船頭一人で客は三人までだったこともわかる。」

「何羨録」のエサの部分では、沖の手釣りにはエビの頭をそのままにしておき、しっ尾の先だけを少し切って、しっ尾のほうから鉤をさし、鉤先をエビの足の間から少し出して使うことがあるとある。私たちがメバルの釣行時、シラサエビのしっ尾を切り、針に刺すが、これは水中に仕掛けを投入後、エビがくるくる回らないためである。当然、くるくる回ってエビ本来の動きではないから、魚は喰わないことになる。

川柳でも沖釣りに対して、安全を詠んでいる。

『俳風柳多留全集・索引編』⁽⁸⁷⁾

沖釣を小づりの方へかちを取り 八一 8

大型魚を釣るために沖合いへ出たが、天気が悪くなり、岸のあたりへ戻り、小型の魚釣りに変えた。

沖釣りの風がかわって辰巳なり 一六 33

辰巳は南東にあたり、夏に南東から吹く強風(台風)ではあぶなくて沖釣りどころではない。

沖釣りは心肝腎の糸の脈 四一 16

沖釣りでは深い場所の魚を探るので全神経を糸にそそぐ。脈釣りと命の脈をかけている。

最初と二番目の句は風向きが変わると小さな舟ではいつ転覆にあうかわからないので、風に変化があると、急いで安全な場所での釣りとなる。

「教訓雑長持」⁽⁸⁸⁾には、船に乗り沖合に釣りに行く様子を描いている。当時としても沖釣りは命がけであることを伝えている。

又釣漁の事を戒の条目に入たは、必危げもない、河端や、堀の廻りに、編笠を尻敷に、悠然たるさま、知恵のない、太公望と見ゆるを叱るじゃござらぬ。独身者の、跡はうぬが三昧と、身を塵芥のごとく軽じたる者は格別、親妻子など有て、ひとり身ならぬ者の。海上不測の変災あるべき共思はで、内河の船頭を瀬に、海原はるかに漕ぎ出して、うつかりひょんと竿をとらへてゐるは、地

獄の釜の上を、綱渡りするやうな物。斯云を釣ずきな者が聞と、其やうな臆病で何の役に立ものぞ。西国・四国へ往来する者はどうせうぞ。そして先此方等は、日和をとくと見落して出ると云であるが、朝からしれる日和に乗出す者は、一人りもあるべからず。海上の斗がたきは、さしも名高き、沖船頭の海老蔵といわれし、徳蔵さへ、千尋の底へ、どんぶりいせしたは、まだ余り遠からぬ噂。それになんぞや沖へ出る親しらず、縦令親はなき身にもせよ、仕官ならば、主君の為に捨る命。なぐさみ事に捨ては、鯨喰て死だも同然。主恩に背き、不忠ではあるまいか。まして妻子兄弟の歎き、そもくいか斗ならん。たとへ海上おだやかにもせよ、夜ふかに宿を出て、又夜に入迄帰らねば、其内の宿での苦勞、まして俄に、風雨などする時は、帰りし顔を見ぬ内は、食事も咽へ入ことなく、あんじさせて、さりととは思ひやりなき、不仁な遊興。尤釣は唐・大和、古今の貴賤、楽みの一つなれば、何の氣遣ひのない、」

『塵塚談』にも祭礼と釣りに行く比喻を紹介している。

馬鹿者、産生神の渡り祭礼には、齋戒して出づべきに、無慚に妻子を売りにて衣服をこしらえ、祭礼に出る者あり。またこれに似たる者あり、漁釣をもって楽しみとし、海路三四里、小舟に乗りて網を打ち釣に出る者多し、わが楽しみに君親妻子を忘るるにより、神明の罰を蒙り、まゝ暴風吹き起り、命をうしなうもあり。あるいは困苦して十里二十里の遠所へ漂流し、あやうきめに逢う

もあり、なかには水泳の心少しもなく、いわゆる鉄砲玉にて、狗死するもあるなり。陸釣といえど、四五里も田舎の遠きところへ行くことなり、江戸は芝、深川、大川通り、八九月ころは釣人万をもつて数うべし。両国より小日向まで千人、同五つ目まで千人あるべしという。生涯にただ一日の日をよしなき楽しみにおくるは、なげかわし、祭礼に妻子を売ると、ひとしき大馬鹿者ものといふべし。

十二キロメートルから十六キロメートル沖合いでの釣りは命を失うこともあるのに、多くの人が釣りに出かける。釣り日和になると陸釣りでも万人の釣人があらわれる。この筆者は「馬鹿者」と一刀両断にしている。

今に比べて船の装備にも違いがあるし、船体の頑丈さは科学的な視点が導入されている。救命具など総てにおいて違いがある。一番の違いは安全性である。それこそ江戸時代は、死と隣り合わせだといえる。板子一枚下は地獄ともいう、右の文献には実感がある。

9 タチウオは砂泥地を好む

「日中は水深100〜300メートルの砂泥地に群生し、朝夕の薄暗い時間に、海面近くまで浮上する。」大塚貴汪の『大塚貴汪の沖釣りパーフェクトブック』に書かれている。『増補改定版新釣百科』にも、習性として、水深百五十尋から二百尋内外の深海で泥底になつ

たところに棲み、と記述されている。他の著書にはタチウオが砂泥地を好むとの記載はないが、右の二書にタチウオは砂泥地を好むと記載されている。しかし、どうしてタチウオが砂泥地を好むのか理由が書かれていない。これは長い間の疑問点だった。この疑問点を解く論文を発見した。二〇一一年三月に発行された「日本水産学会誌」に土居内龍以下八名の研究者が「炭素・窒素安定同位体比に基づく紀伊水道におけるタチウオとその他の底生魚類の炭素源の比較⁽²⁾」という論文をまとめた。

和歌山県・徳島県のタチウオの漁獲量は一九九〇年代中頃には八千トンから八千五百トンを記録したが、その後は減少傾向にあり、二〇〇七年の漁獲量は約三千トンである。資源量変動要因の一つとして阪本は主要餌生物であるマルソコシラエビの増減を示唆している。マルソコシラエビの増減は一次生産量の変動が影響していると推測し、紀伊水道は栄養塩に富んだ低層水の外海からの侵入が近年弱体化しており、これが植物プランクトン量の減少を引き起こし、タチウオを含めた高次生産の総体的な低下につながると考えている。

タチウオは低生魚類の一種として位置づけられることが多いが、日周鉛直移動を行うことから低層から表層まで幅広い空間を利用している。したがって、タチウオにとっては植物プランクトンと低生微細藻類の双方が炭素源になり得る可能性がある、と述べている。

それでは魚類・甲殻類の炭素源はどのようになっているのか。「推定された植物プランクトン寄与率をテーブル²と³に記す。タチウオ

における植物プランクトン寄与率五一・六パーセントであり、炭素源として植物プランクトンと低生微細藻類をおよそ半分ずつ利用していることが示された。その他の低生魚類における植物プランクトン寄与率は三・一～四三パーセントであり、いずれもタチウオより低かった。タチウオの主要餌生物における植物プランクトン寄与率は四一・八～五五・八パーセントであり、タチウオの値に近かった。低生甲殻類における植物プランクトン寄与率は三・一～三二・七パーセントであり、その他の低生魚類の値に近かった。」

そのようなことから同論文は「タチウオについても日周鉛直移動を行うことが知られている。本種の日周鉛直移動の様式は、東シナ海では日中沈下して夜間浮上するタイプと、夜間沈下して日中浮上するタイプが存在するが、紀伊水道や若狭湾では日中沈下して夜間浮上するタイプのみが知られている。また紀伊水道におけるこのような日周鉛直移動は、マルソコシラエビの日周鉛直移動に同調して行われている可能性が示唆されている。したがって紀伊水道産タチウオは、日周鉛直移動を行うことによって、マルソコシラエビを捕食する機会が増加するほか、サイウオ属やマイワシ、カタクチイワシといった表中層に出現する餌生物を利用することができ、このことが他の低生魚類と比較して、植物プランクトン起源の炭素供給を多く受けている要因であると推察される。」

「Liu et al.によると、太平洋西部の日本南方海域では *Trichodesmium* 属などの藍藻類が窒素固定により大気窒素を活発に

取り込み、「 $\delta^{15}\text{N}$ 」値の低い有機物が産み出されている。この有機物は黒潮によって運ばれ、黒潮の影響が及ぶ海域における生物・有機物の「 $\delta^{15}\text{N}$ 」値を総じて低下させるものと考えられており」とあるが、この意味は「 $\delta^{15}\text{N}$ 」値についてはマルソコシラエビが最も高く、マイワシが最も低い値を示した。

更に同論文では砂泥底について、「紀伊水道は大部分が平坦な陸棚域で、底質は泥、砂、礫が主体であり、岩礁域は沿岸のごくわずかな海域に限られる」としている。瀬戸内海でタチウオが多い理由でもある。「安芸灘とその周辺海域では、海藻、海草、底生微細藻類を含む底生植物が底生魚類にとって主要な炭素供給であることが示され、これらの底生植物から底生魚類への炭素供給を仲介する生物として、底生無脊椎動物の存在がある。広島湾や大阪湾のカタクチイワシが高い値を示すのは、内湾域のカタクチイワシが動物プランクトンや植物プランクトンに加え、十脚類や多毛類など底生性の無脊椎動物を多く捕食しているためと考えられている。」

10 タチウオの食性

タチウオの食性について面白い研究がある。「千葉県内房海域で漁獲されるタチウオ *Trichurus lepturus* の相対成長、食性及び成熟について⁽³⁾」によると、千葉県の内房、内湾地区で釣りにより漁獲されたタチウオは、主として甲殻類と魚類を補食していることが明らかと

なった。銘柄別(タチウオ五百グラム以上、三十センチ以上、小タチ三百グラム～五百グラム二十五～三十センチ、小小タチ三百グラム未満二十二～二十八センチ)に見ても、両者の出現率はほぼ三十パーセント程度であるが、魚体が大きいほど甲殻類の出現率がやや高くなる傾向がみられた。甲殻類の内では、エビ類がほとんどで、シヤコ類、オキアミ類がわずかながら検出された。魚類ではメゴチの出現頻度が高く、次いでカタクチイワシ等イワシ類、タチウオ、アジが検出された。その他としてはイカ、タコ類の頭足類が少数検出された。タチウオの食性について、東シナ海・黄海では体長二十五センチを境に小エビ類、オキアミ類等プランクトン性の餌生物からカタクチイワシ、キグチ、同種のタチウオ等遊泳力が大きい餌生物へと移行することが報告されているが、本報告の結果では、成長に伴うこのような食性の変化は認められず、小から大まで一貫してエビ類主体の甲殻類とメゴチ、イワシ類主体の魚類が大半を占めていた。東シナ海・黄海産のタチウオの胃内からは、共食いとなるタチウオが検出され、越冬期と産卵期におけるタチウオ魚群の密集と餌不足がその原因として考えられている。本研究でも東シナ海・黄海と同様、主に冬期間にタチウオの胃内からタチウオが検出されたが、駿河湾産のタチウオでは、周年カタクチイワシの出現率が高く、タチウオは検出されていない。これは、それぞれの海域の餌料生物の分布の違いが反映された結果と考えられる。

「日本海中部海域産タチウオの資源管理⁽⁹⁴⁾」では、どうか。

タチウオの食性は、橈脚類などの小型動物プランクトンからはじまって、エビ類、アミ類、カタクチイワシ稚魚、次いでカタクチイワシ幼魚、さらにイワシ類の成魚へと成長に伴って順次大型の餌生物に変化する。なお、動物プランクトンから魚食性への移行は体長二十～六十ミリで始まり、体長六十ミリ以上でその傾向が強まる。他海域産タチウオの魚食性への移行は、大阪湾においては体長百七十ミリ以上、東海・黄海においては二百六十ミリ以上と報告されており、当海域のタチウオと比べて大きな体長で行われている。このように、海域によってタチウオが魚食性へ変化する体長が異なる原因としては、当海域の成魚の食性でみられたと同様に、海域による餌生物の組成や分布密度の違いなどが考えられるが、まだ充分に説明されていない。沖縄での調査に「タチウオ漁場調査」がある。

同調査中の胃内容物調査結果を表3に示したが、調査した二百二十四個体のうち百七十五個体は空胃又は釣りに使用した餌のみが確認された個体で全体の七十八パーセントであった。これは漁獲水深が三百メートル以上と深いため水圧変化による鰾膨張による胃の反転が起こりやすいためと思われる。摂餌していた個体四十九個体についてみると魚類（消化が進んでいるため固定不能なもの）が主体で次いでオキヒメヒドシエビ、イカ類が多かった。分類できた魚類ではハダカイワシ類が多く、タチウオの共食いも三例認められた。食性調査は前年度に引き続き実施したが、胃内容物の出現傾向は似ており魚類とオキヒメヒドシエビが多く、次いでイカ類が多かった。

表3 タチウオの胃内容物調査結果

魚類	6	ハダカイワシ	タチウオ	3
△ロアジ類	2	フグ ⁹⁵	エビ類	2
オキヒメヒドシエビ			イカ類	19
タコ類	2	消化物	4	

西海区水産研究所では、「平成二十四年度タチウオ日本海・東シナ海系群の資源評価」⁹⁶がまとめられた。

肛門全長が二十ミリ以下の小型個体は小型甲殻類を補食することが多く、中・大型個体は、カタクチイワシ、トウゴロウイワシ、キビナゴ等の小型魚類を捕食する（三栖一九六四、最首・最首一九六五、鈴木・木村一九八〇）。タチウオは成長に伴い魚食性が強くなる。本種の被食に関する報告は無いが、共食い現象がみられ、特に密集期である越冬期と産卵期に多い。

11 タチウオの実釣

初めてタチウオ釣りに出かけたのは昭和六十年（一九八五）か六十年（一九八六）頃だったように思う。職場に御坊出身の方がいて、その人は酒が好きで飲み屋でよく会った程度だったが、いつとはなく会つと釣りの話になった。どのような経緯で魚釣りの話になり、タチウオ釣りに同行したのか記憶にはない。夏休みに入った八月の初旬頃だったか釣行日を決めた。釣行日の当日は大和西大寺駅で待合わせを

して、私の車に同乗する。御坊の彼の親戚に行く予定で、それは彼の妹の家であった。42号線を目指し、阪和道を走る。和歌山市内の国道沿いで彼が帰省するときに必ず立ち寄る店のうどん屋で腹ごしらえを終えると、一路御坊に向けて走った。親戚に着くと型どおりの挨拶が終わった。それから、現在は空き家となっている彼の実家に着いた。そこから数分走ると、彼の親戚の津久野に着く。ここは海岸に近く水が貴重で井戸もあるが金銭があり飲料水には不向きであると、水の使用について注意を促された。飲料水については海岸から遠い場所にある井戸水を使用している、水の使用は貴重である故、丁寧に扱うように何度も言われた。

壁には医者になった息子達の写真があり、自慢の息子らしい。思いがけず戦争の話になり人を殺す話題に及んだ時、本当に人を殺した者は喋らない、この一言に真実が汲みとれた。戦争中の出来事を面白おかしくまるで自分がヒーローのように語る人は傍観者ではない。釣りの話に及ぶと俄然饒舌になり、舟は二艘あり、今夜のタチウオ釣りは小さな船で出船するが、鰯の季節には、多少浪が荒くても日ノ岬まで出漁して鰯を釣るとの事だった。毎年春になると鰯釣りを楽しみにしている。この老人とは親子ほどの年齢の差があり、釣りの考えにも差があった。この漁師の密かな楽しみが実感できなかった。御坊の自慢はタチウオを網で獲らないことだ。網を使用するとタチウオの皮（グアニン）が剥落して、見た目が悪い。傷が付くタチウオの値が下がるらしい。一本釣りだとタチウオに傷がつかず皮も痛めないで美

しい姿を保ったままだ。そのために高値で取引できる、と語っていた。このあたりの猫は、古い魚を食べない。一日経過した魚は「猫マタギ」といつて魚をまたいで通り、見向きもしないらしい。

先程の鰯は、体長一メートル、体に斑点があり引きが強い。鋭い歯をもっているのはタチウオと共通している。両魚ともフィッシュイーターである。

鰯にはいさか思い入れがある。五、六年前には釣り仲間と一緒に愛媛へ釣行した。

愛媛沖にメートル級のタチウオが釣れると聞きこんだ釣り人から連絡が入り、船に乗り込み沖合をめざすことになった。五人でタチウオ釣りに同行したが、生憎当日は、タチウオの潮ではなく、青物が良いとのことで、急きょ釣りの対象が変わり、ハマチ釣りになった。丁度船に五人が乗りあわせていたので、鰯釣りに行っても結構釣れるだろうと思っていたが、沢山の鰯を釣りあげ、これだけあれば、十分にハマチ釣りを楽しめる。もし最悪の場合には、土産にもなると思った。何匹かハマチを釣り上げた後、釣りに興じている最中にアタリがあつて、アワセを入れると強い引きに、ハマチ以外の魚だと直感したが、どのような魚であるか分からなかった。水面近くまで引き上げると魚体に斑点が見え、瞬時に鰯とわかった。しつかり針がかりしているのか、ばらさないように慎重にリールを巻いた。同時に心の中でワクワクするような気持が押し上がってきた。

話を戻すことにする。

私は早く釣りたいために陽が高いにもかかわらず漁師を急かし、出船することになった。

漁師は、「タチウオ釣りには早いが出かけよう」、この一言が待ち焦がれた言葉だった。小舟に三人が乗船すると、誰もいない津久野の小さな浜辺からゆっくり舟は岸を離れた。

沖に出る途中でエソを釣り、素早く三枚におろし、白身をタチウオテンヤにくくりつけた。この頃のタチウオテンヤは鉛製で、丸い頭に「つ」の字の平仮名のような形、「つ」の上に細長くて薄い板がある。この上に白身なり、冷凍イワシを括りつけるのだが、この時はエソの白身だった。

タチウオ釣りは竿ではなく手釣りであった。手釣りの経験がない私は、船頭からの注意を聞いた。糸に仕掛けを結び、ケミホタルを付けた。暗くなったらケミホタルを折る。テグスに赤いテープが巻いてある部分が二十五メートル、最初はそのあたりからやって、タチウオが釣れ出したら徐々に短くしていく、タチウオを浅い場所ですり、手返しを早くする。順調に行けば多く釣れる筈である。前アタリがあっても構わず上へ上へと誘うと喰いついてくる、所謂本アタリがでるのでも、そこでアワシてみる。説明後、仕掛けの糸をほどき、仕掛けを投入していく段になると、船縁に竹が打ちつけてありそこで滑らしながら下ろしていく。投入後、小さなアタリと共に本アタリがあり、即座にアワシた。その前にタチウオが掛かり船上に釣りあげた後、首を折ると聞いていたが、タチウオが姿を現し、恐怖のために捕まえる事が

出来なかった。船頭の前にはぶらぶらさせていたら、直ぐにタチウオを捕まえ首を折り、水槽に入れた。

二度目に仕掛けを投入後、赤いテープの目印辺りで誘うがアタリがない、二、三メートル辺りで上に誘うと、小さな前アタリの後、本アタリが出て、アワシ、糸をたぐる、途中タチウオの重さがなくなつた。逃げられたと思っていたが、船頭は構わずたぐり続けと、声を枯らす。そのあと急にタチウオが暴れ出しぐいぐい引つ張る。手に重量感と強い引きを感じる。今度は自分でタチウオを左手で捕まえ勢いよく首を折った。またまた船頭の忠告で何も鬼の首をへし折るような感じではなく、普通に折ればよい。素人のしぐさに漁師は我慢ならなかったらしい。初めてのタチウオの釣果は五、六匹だったように思う。初めての御坊でのタチウオ釣りは終わった。

釣り上げたタチウオの調理方法を聞かれたが、塩焼きしか知らなかった。和歌山では、タチウオを煮つけて食べるが、これも美味しいとのことだった。せっかくだから煮つけにしていた。大阪では塩を振り、焼き魚でいただいていただけに味に変化があつて美味しかった。

偶然にも古い手帳にタチウオの釣果が記載しており、場所は須磨沖で、タチウオ釣りの年度と潮・舟名・数を紹介する。恥ずかしい釣果だが、ここから得た技術もあるので掲載することにした(表4)。

ほぼ十一年分の釣果である。二〇一三年十月までは、二桁はあまりなく、あつてもたまたま釣れた結果であるとしかしいようがない。こ

表 4

年	月 日	潮	乗船船名	釣果
二〇〇五年	八月二十五日	中潮	仙正丸	一一匹
	九月十一日	小潮	同	一一匹
	九月二十二日	中潮	同	一七匹
	十月十六日	大潮	同	六匹
	十一月七日	中潮	宝来丸	六匹
二〇〇六年	十月九日	中潮	仙正丸	二匹
	十月三十日	小潮	同	三匹
二〇〇七年	八月十七日	中潮	仙正丸	一匹
	八月二十一日	小潮	名田屋	一匹
二〇〇八年	八月四日	中潮		五匹
	九月十二日	同	西海丸	四匹
	十月十日	同	鍵庄	一二匹
	十月十八日	中潮	仙正丸	四匹
二〇〇九年	八月三十日	長潮		一匹
二〇一〇年	九月二十三年	大潮	仙正丸	一匹 雷雨のため二時間
	十月十七日	長潮	同	一七匹
二〇一一年	十一月五日	長潮	同	九匹
二〇一二年	八月二十七日		同	五匹
	九月二十六日	若潮	盛和丸	一一匹
	十月二十七日	中潮	同	一四匹
	十一月八日	長潮	同	一一匹
二〇一三年	八月五日	大潮	同	九匹
	八月二十日	同	同	四匹

年	月 日	潮	乗船船名	釣果
二〇一三年	八月二十八日	小潮	同	三匹
	九月十四日	長潮	同	九匹
	九月二十一日	大潮	同	二匹
	九月三十日	若潮	同	五匹
	十月二十九日	長潮	同	一五匹
	十一月十二日	同	同	一〇匹
	十一月二十四日	小潮	同	一九匹
	十二月十八日	若潮	同	一五匹
二〇一四年	一月二十五日	長潮	同	一五匹
	八月二十日	同	同	二匹 酔って九時三十分まで
	九月四日	若潮	同	二七匹
	九月二十二日	大潮	同	五匹
	十月十八日	長潮	同	一五匹
	十一月十八日	若潮	同	一二匹
	十二月十六日	長潮	同	一〇匹
二〇一五年	八月十日	若潮	同	九匹
	九月十二日	大潮	同	五匹
	十一月十九日	小潮	同	六匹
	十二月七日	若潮	同	一八匹
	二月二十一日	同	同	一三匹

の釣果は、タチウオ釣りのスタイルを持っていないからである。十月二十九日は同船し、隣にいた尾高氏にアルファタックルの竿を借り、釣果を伸ばした。ここで尾高さんのゴーアンドストップを初めて見た。それ以後二桁の釣果は続いたが、この頃からさまざまな情報を集めては試してみたが、うまくいく場合とそうでない場合があった。多くの情報を集めて釣りに挑んだが、思ったほどの結果はでなかった。情報を整理しきれないまま迷っていた。二〇一五年の八月以降は迷いの結果を示している。もう一つ確かな情報であっても技術を身につけることができなかった。まったく悩ましい魚である。釣れる時は、何

もしないでも勝手に釣れる。仕掛けを回収するときにリールを早く巻き上げる。その時に、タチウオが仕掛けに食らいつき釣れたことは何度も経験している。また、仕掛けを落とし、最初にしゃくった時にもかかったし、電動リールを微速巻き上げ時にコンコンの当たりに竿が大きく海中に引き込まれるアタリなどは代表的なアタリといえる。面倒なのはアタリが小さい、アタリが続かない、アタリがないときである。次のアタリを引き出す技術がないので、そこで終わってしまう。

そんな厳しい状況でもゴーアンドストップを繰り返して、タチウオの関心を寄せる。

しゃくり続けてタチウオを掛けるのは、信念がないと釣れないように思う。

日本で電動リールが誕生したのは昭和四十五年（一九七〇）、ミヤマエという会社が制作したらしい。十年ほど前に知人に誘われて電動

リールとバッテリーを購入した。バッテリーは重く、帰宅してから充電しなければならず不便だった。当時日本海側の五目釣り・イカ釣りのため船に配線をめぐらしてあった。その当時須磨では配線の船は少なかったように思う。バッテリーを購入した翌年から船に配線されたように記憶している。

先輩に連れられた最初のタチウオ釣りでは、竿で釣ったが、事前に教えてもらった釣り方は、とにかくゆっくり巻き上げる、棚を見つめるのもゆっくり巻き続けるのである。そのためタチウオ釣りでは莫大な時間と無為な動作で時間が経過していった。仙正丸に乗船していた長野さんからは、兎に角何でもやってください。というアドバイスを受けたが、何をどうしたらいいのか解らなかった。先輩の教えは、ただ一つゆっくり巻き、上へ上へ誘っていき、やがてコツコツというアタリがあっても巻き続けると竿が海面に刺すぐらいの強い引きがある。その時にアワセる。そのような説明だった。

バッテリーに電動リールの線を接続し、微速で電動リールを巻き上げるがアタリがない。しかし、諦めずに巻き上げていると、コツンと小さなアタリがある。それでもゆっくり巻き上げる、コツコツとアタリが続く、更に巻き上げる、またコツコツとアタリがあり、続いてぐつ、ぐつと竿が深く曲がる。ここでアワセを入れ電動のレバーを中速に上げる。これを含めて数回タチウオ釣りを経験しての結論は、手巻きでなくても電動で巻き上げて同じ様に釣れる。このような横着な結論を出してタチウオ釣りの長い迷いのトンネルに入った。

電動巻き上げの釣果は十八匹を釣り上げたのが二度ほどあった。それは潮が良かった。たまたま釣れたのである、その程度の結果である。

アタリが一回コンと来て、巻いていても連続のアタリがない。このアタリに何の注意もしなかった。当初教えてもらった通りの釣法を順守していた。平成二十四年（二〇一二）の秋にリールの不具合が発生して、やむなく手巻きをしていた。電動リールではわからない色々なアタリを経験した。一回きりのコン、いきなりコンコン、コンと来て二度目のコンコンその後は何もなし、いきなり竿が水面に入るような引っ手繰るようなアタリ、喰い上げのアタリ、エサを喰えて停止しているアタリ、このような未解決のアタリに悩み続けた。平成二十五年（二〇一三）以降にも未解決な問題を継続した釣りだった。平成二十五年はさまざまなアタリに挑戦する、との思いを密かに胸にしまいこんだ。きたるべき時に解決すればよいと勝手に思っていた。

夏・秋・冬ではアタリの出方や誘いが違う。これは潮まわりでも同じで、朝の誘いは良かったが、昼からは違う誘いが有効な場合がある。

仙正丸の船長が断続的な小さなアタリは直ぐにアワセなさい、と言ったのも有益と思えた。

平成二十六年（二〇一四）一月のタチウオ釣りでは、小刻みにコンコンと来た時に見事に掛けアワセた。それはたまたま掛かったように思う。

夏から秋にかけてコンと一回のアタリがあった時、巻き上げを止め、静止する。数秒後タチウオがエサにからむと同時にアタリがあり、竿が曲がる。同様のことが冬には駄目だった。また、一度アタリがあれば、竿を下げ頭上まで高く上げる。その後ゆっくり巻きアタリを引き出す。

いずれにしても電動の巻き上げは多くの人が試していた。現在では状況・潮によっては手巻きと電動巻きとを使いわけるようにしている。

私たちが教えてもらった方法は、ゆっくり巻き上げるのみで、個々の前アタリの対応は教えてくれなかった。

平成二十五年九月頃だったか上手な人の隣に席をとり、隣人の手の動きを見てみると、ハンドルを二回転、しかも早く廻している。時折竿を高く掲げてゆっくり竿を下るしながらハンドルをゆっくり廻している。いつアワセたのかわからないが、電動リールで中速以下で巻き上げ、最後は手巻きでタチウオを釣りあげた。理解できない動作だけが頭に残った。

上手な人は今日のアタリ棚を見つけ徹底的に攻めている。テクニクを駆使してタチウオのアタリを引き出し釣りあげる。

インターネットのタチウオ情報は有効である反面、未熟な釣り人には技術が身に付かず釣果に直結しにくい。

次に今日のアタリ棚を発見する。棚は一カ所とは限らない。直接仕掛けを落として有効なタナを探る。これで潮がよければ数匹から十数

匹は釣れる。困ったのは、もたれる感じでタチウオが動かない場合の処置であつたり、一回のアタリや小刻みな小さなアタリがあつて継続したアタリが出ない場合の処置であつた。最近はやつくり巻き上げるようにしている。

そして、偶然釣れる時もある。

糸をサミングしながら落とす時にアタリがある。

サミングしながら落とす時にアタリが出た場合、喰い上げの場合は、糸ふけを素早くとり、ハンドルを勢いよく回すか、電動リールのスイッチを高速に入れる。

コンと来たら竿先を止めてタチウオの次のアタリを待つ。待つていとタチウオのアタリが来て、竿を締め込むのだが、冬場は締め込みが少ない。連続したアタリがない場合は、竿を大きくあおつて止める。この場合もタチウオのタナがつかんでいる時は有効である。すべて、その日その時の潮の状態でタチウオの活性並びにエサの捕食が変化している。つまり釣り人はタチウオのアタリを熟知していないと多くは釣れない。つまりひとつのアタリから次のアタリを引き出す操作が必要である。

しゃくりを入れたり、ゆっくり頭上まで竿を上げる動作を繰り返す。シェイキング等を行いアタリを引き出しアタリがあればアワス。このような事を以前、長野船長が私に言った。なんでもやってください、このような意味だった。

平成二十七年（二〇一五）十二月にタチウオ釣りが終わり、盛和丸

の長野船長⁽⁹⁸⁾と立ち話をしたときに、タチウオ釣りが上手な藤木さんについて、長野船長のブログに次の言葉が掲載されていた。「もう引退かと思いました。最近釣果がよくなかったので冗談をまじえての短評だった」。藤木さんのタチウオ釣りは、徹底的にしゃくつてタチウオを攻める。当然のことながらゆっくり誘えばタチウオが釣れることは豊富な知識と高い技術力に裏打ちされている。そのような方法で釣り上げてもご本人は満足しないらしい、と聞いている。また尾高さんは、ゴーアンドストップの方法で釣果をのばしている。もちろん、言うまでもないことだが高い技術を駆使して釣果をのばしている。従前のゆっくり誘う方法も潮などを考えれば有効な方法で、形の良い大きなタチウオを釣る人もいる。私がうらやましく思うのは自分の釣りのスタイルを確立していることである。

ここで、最新の釣り技術を紹介する『船釣りフェスタ 二〇一四 in 京セラドーム大阪』に矢野貴雄が書いている⁽⁹⁹⁾。

今までは、「巻き」で誘つて、「巻き」で食わせて掛ける、あるいは、巻いて見せて、「止め」でアタリを出して、「巻き」で食わせて掛ける…という釣りでした。掛けるためには、「巻き」が必要だと言つのがこれまでのテンヤタチウオでの一般的なスタイルでした。これが変わります。大まかに言つと、「止め」でアタリを出して、そのまま掛ける、というスタイルに。今までと真逆とも言える、この変革。きつかけは、メタリアタチウオ（ダイワ）の登場でした。この竿のおかげで、ファーストタッチ時のタチウ

オへ違和感の軽減が計れ、その結果、コツンとくるアタリの中に、実はテンヤを噛んだままの状態があるということと、メタリアのメタルトップにより、それを誘発できることがわかったのです。そして、それが誘発できるなら、そのコツンを出すための誘いで、現状最も適しているのが、ニメートル巻きで止めていく「ストップアンドゴー」のスタイル。ニメートル巻いて止めて待つ。この待っている時にコツンとアタリが来る。コツンとアタリが出たら、すかさず、竿先を下げる。タチウオがテンヤを噛んだままなら、竿先のメタルトップが真っ直ぐに伸びる、離していれば竿先は曲がったまま。竿先が真っ直ぐになれば、すかさずアワセる。これで、ほぼ百%掛かります。竿先が曲がったままなら、さらにストップアンドゴーを続ける。…というスタイル。このスタイルに気がついていた大阪の船長さんもおられ、ご協力と後押しをいただいて、これを実践するためのリーサルウェポン、極鋭タチウオテンヤSP（ダイワ）が完成しました。これで、タチウオテンヤ釣りが変わります。おっと、そうは言っても他の釣り同様、一つのパターンでは対処できないケースももちろんあります。この釣りという別のパターン、それは、スロー巻きでしか食わない時。その時にリーサルウェポンは使えるのか？これはちよつと厳しいです。だったらどうする？リーディングスリルゲーム（ダイワ）という、乗せ調子のファイナルウェポンがあります。このスリルゲームに、シーボーグ300J（ダイワ）の組

み合わせで、ひたすらスロー巻き。竿先が海面に刺さったら、一気にジョグアワセ！

もう一人紹介する。『船』二〇一五 new fune fishing tackles シマノのカタログに今井浩次は次のように書いている。

最近のテンヤタチウオはアタリが出た直後に即アワセしても、エサのイワシにかすり傷さえ付いてないことがあると今井浩次は言う。ただ巻きしているだけではコツコツとアタるものの、どこで合わせたらいいのか、さっぱりタイミングが掴めないことも珍しくない。釣り方を問わずタチウオフリークの多い大阪湾周辺だが、やはりテンヤタチウオに対する情熱は他を寄せ付けないものがある。そして通い慣れたベテランをも悩ませ続ける奥深さを、この釣りは内包している。着底させたテンヤをゆっくり巻き上げる。これが操作のベシックであり、かつては「ただ巻いていたら掛かってきた」牧歌的な時代だった。また、三十号が基本だったテンヤも今は四十号がアベレージとなっている。水深五十〜七十mのポイントがせいぜいだったのが、今は九十mを超える水深で竿を出すことが珍しくなくなっている。以前は海面下十五mまで巻き上げてモアタつてきたケースが見られたが、今のタチウオはそこまで追ってることが少なくなってしまった。最新の釣りは、ただ巻き上げるだけの釣りではない。アタれば即アワセ。掛からなければ、そこから誘う、止めるなど、あらゆる工夫で掛けにいくようなスタイルへと変わりつつある。半面、電動リールに

任せっぱなしの巻き上げで、昔ながらの長く軟らかい竿を使っているベテランアングラが竿頭になることもあるから、ますます悩みは深くなる。

ただひとつ言えることは、原因・理由はさておき、攻略方法はワンプターンでは通用しないという事実である。誘いや巻きスピード、微妙な操作など、数を伸ばすための引き出しの多さ、つまりは柔軟な状況対応力が求められる。魚探にも反応が出にくいときれるタチウオだけに、手を変え、品を変えて積極的な攻めの釣りに活路は開かれるのだ。64ML210は、活性が低い時や明確なアタリが出ない時に。82H190は、リズムカルにストップアンドゴーを繰り返し、効率よくタチウオのタナを探る時に。91H185は、激しく誘う、繊細に誘うなど、自由自在な操作が可能。だがしかし、現実の釣りになると、いち早くパターンを見つけたとしても、アタリの数は釣り上げた数の数倍ということも少なくない。関西のテンヤタチウオを知り尽くしている今井浩次でさえ「タチウオはわからん」と、笑顔で首を傾けた。

このような悩ましい魚を知るために、明治時代・江戸時代のタチウオ釣りの日記なり、タチウオに関係する資料にぜひめぐり会いたいと思っている。

注

- (1) NHKテレビ〈ダーウィンが来た!「タチウオ千本刀」〉平成二十七年一月二十五日 www.youtube.com/watch?
- (2) 朝日新聞朝刊、二〇一三年十一月四日「マグロ先祖は深海魚」祖先は同じ? マグロやサバの起源。
- (3) 『伊京集』室町時代末期の筆写本
- (4) 編訳士井忠生、森田武、長南実『邦訳日葡辞書』岩波書店、一九九五年 慶長八年(一六〇三)に本編、慶長九年(一六〇四)に補遺ができた
- (5) 編貝原益軒『大和本草』宝永七年(一七〇九)巻十三、海魚
- (6) 小野蘭山『本草綱目啓蒙』(小野蘭山「本草綱目啓蒙」万暦二十四年(一五九六)平凡社、一九九一年
- (7) 訳注島田勇雄『本朝食鑑』(人見必大「本朝食鑑」元禄十年(一六九七)平凡社、一九八二年
- (8) 訳注島田勇雄、竹島淳夫、樋口元巳『和漢三才図会』(寺島良安「和漢三才図会」正徳二年(一七二二)平凡社、一九九二年
- (9) 校訂東條操『物類称呼』(編越谷吾山「物類称呼」安永四年(一七七五)岩波書店、二〇一一年
- (10) (蝶夢「新類題発句集」寛政五年(一七九三)早稲田大学図書館 www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/bunko18/.../index.html
- (11) 正岡子規『子規全集』第一巻、改造社、一九三〇年
- (12) 編杉山博久先生古稀記念論集刊行会『地域と学史の考古学』六一書房、二〇〇九年、
- (13) 「見えるぞ! ニッポン」高知県「カツオの一本釣り」四月二十七日 www.nhk.or.jp/syakai/mieruzo/
- (14) 山口和雄『日本漁業史』東京大学出版会、二〇〇一年
- (15) 編千葉県立中央博物館分館海の博物館『海の博物館』千葉県立中央博物館友の会、二〇〇〇年
- (16) 編富士市立博物館『富士市の沿岸漁業』富士市立博物館、一九八九

年、

- (17) 編 静岡県漁業組合取締所『静岡県水産誌』静岡県漁業組合取締所、一八九四年
- (18) 編 江東区教育委員会『江戸前に生きる』江東区教育委員会、二〇〇六年
- (19) 野村圭佑『江戸の自然誌——武江産物志』を読む(岩崎常正「武江産物志」文政七年(一八二四))とくぶつ社、二〇〇二年
- (20) 大橋青湖『釣魚秘伝集』(武井周作「魚鑑」天保二年(一八三一)第一書房、一九三〇年
- (21) 校注揖斐 高(柏木如亭「詩本草」万延元年(一八六〇))岩波書店、二〇〇六年
- (22) 松下幸子『江戸料理読本』筑摩書房、二〇一二年
- (23) 早稲田大学図書館(勝間竜水「名産諸色往来」宝暦六年(一七五六)) www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/search.php?..
- (24) 吉井始子『翻刻江戸時代料理本集成』第五卷(「万宝料理秘密箱」寛政十二年(一八〇〇))臨川書店、一九八〇年
- (25) 吉井始子『翻刻江戸時代料理本集成』第十卷(「四季献立会席料理秘囊抄」文久三年(一八六三))臨川書店、一九八一年
- (26) 吉井始子『翻刻江戸時代料理本集成』第八卷(「会席料理細工包丁」文化三年(一八〇六))臨川書店、一九八〇年
- (27) 吉井始子『翻刻江戸時代料理本集成』第七卷(「素人包丁」二編、文化二年(一八〇五))臨川書店、一九八〇年
- (28) 吉井始子『翻刻江戸時代料理本集成』第四卷(「料理綱目調味抄」享保十五年(一七三〇))臨川書店、一九八七年
- (29) 吉井始子『翻刻江戸時代料理本集成』第六卷(「当流料理献立抄」宝暦和頃(一七五一—一七七)刊記不記)臨川書店、一九八〇年
- (30) 編 大阪府漁業史編さん協議会『大阪府漁業史』大阪府漁業史編さん協議会、一九九七年
- (31) 大阪府立中之島図書館(「撰津国漁法図解」明治十六年(一八八三)) ee.library.pref.osaka.jp/sito/.../lib-zempon-zem63
- (32) 編 大阪府『大阪府誌』第三編 大阪府、一九七〇年
- (33) 「たちのおの漁獲量日本」有田市役所産業振興課水産係、農林水産省 海産物生産統計調査(市町村別データ)
- (34) 『釣針』直良信夫、法政大学出版局、一九七六年
- (35) 注(34)に同じ
- (36) 宮本常一『瀬戸内海の研究』未来社、一九六五年
- (37) 前田金五郎『西鶴大矢数注釈』巻二(井原西鶴「西鶴大矢数」天和元年(一六八一))勉誠社、一九八七年
- (38) 松崎明治『新釣百科』大泉書店、一九六二年
- (39) 快弘丸のブログ「両天秤は漁天秤」二〇一四年六月十八日
- (40) 「富山県遠征!太刀魚釣りレポート」二〇一三年十一月二七日 blog.kashiwazaki-marine.jp/article/381318468.html
- (41) 編 瀬戸市美術館『浮世絵つり百景』(貞斎泉蝶「穂葉の杜若」文政十年(一八二七))瀬戸市美術館、二〇〇八年
- (42) 注(41)に同じ(三代歌川豊国「百人一首絵抄参議簞」弘化元年(一八四四))
- (43) 金森直治『浮世絵一竿百趣』つり人社、二〇〇六年
- (44) 編 瀬戸氏美術館『浮世絵つり百景』(初代歌川国安「東都深川魚釣之図」文化十二(天保十三年(一八一五—一八四二))、発行、二〇〇八年
- (45) 「鹿児島県伝統漁具漁法集」
- (46) 久徳外雄『日本釣漁法全書』有隣堂、一九〇〇年
- (47) 編 農商務省水産局『日本水産採捕誌』アテネ書房、一九二二年
- (48) 『釣鉤図譜』中村利吉、一九七八年、
- (49) 注(47)に同じ
- (50) 注(46)に同じ
- (51) 注(47)に同じ
- (52) 宮本常一『周防大島を中心としたる海の生活誌』未来社、一九九四年

年

- (53) 注(46)に同じ
- (54) 編森浩一『技術と民俗』(森本孝「沖家室島の釣針制作」)小学館、一九八五年
- (55) 高橋豊『なんでもわかる沖釣りの全知識』有紀書房、一九七五年
- (56) 編日本学士院日本科学史刊行会『明治前日本漁業技術史』改訂版、井上書店、一九八二年
- (57) 澁澤敬三『澁澤敬三著作集』第二巻、平凡社、一九九二年
- (58) 注(48)に同じ
- (59) 注(55)に同じ
- (60) 注(56)に同じ
- (61) 注(48)に同じ
- (62) 株式会社ハヤブサには二〇一四年一〇月二十三日にメールにて問い合わせを行った。
- (63) 株式会社ヤマシタお客様窓口には二〇一四年一〇月二十九日にメールにて問い合わせを行った。
- (64) 服部善郎『海釣り大事典』廣済堂、一九九八年
- (65) 編猪田昌明『海のルアー基礎講座』樺出版社、二〇一三年
- (66) www.interq.or.jp/boss/uninchnu/history.html 茂木陽一、二〇〇一年五月十八日
- (67) 編佐藤一祐『I'egu』つり人社、二〇一三年、十三の商品を紹介
- (68) 塚本学『徳川綱吉』吉川弘文堂、一九九八年
- (69) 根崎光男『生類憐みの世界』同成社、二〇〇六年
- (70) 編近世史料研究会代表原島陽一『江戸町触集成』第二巻(元禄六年(二九五六号))塙書房、一九九四年
- (71) 注(70)に同じ(元禄六年(三四九五号))『江戸町触集成』第三巻
- (72) 注(70)注(71)に同じ
- (73) 注(68)に同じ
- (74) 編注『摘録鵜籠中記』(「鵜籠中記」朝日重章)岩波書店、一九

九五年

- (75) 編塚本哲三『武野俗談』(「窓のすさみ追加」松崎堯臣、宝永の末頃)有明堂書店、一九一八年
- (76) 編石井良助『御仕置裁許帳』創文社、一九五九年
- (77) 注(70)に同じ
- (78) 編近世史料研究会代表原島陽一『江戸町触集成』第三巻、塙書房、一九九五年
- (79) 『大阪市史』第三、大阪役所蔵版、清文堂、一九七九年
- (80) 『京都町触集成』第一巻、京都町触研究会、岩波書店、一九八三
- (81) 永田一脩『江戸時代からの釣り』新日本出版社、一九八七年
- (82) 訳注島田『本朝食鑑』4(人見必大「本朝食鑑」元禄十年(一六九七))平凡社、一九八〇年、きすこ魚の項に「江と都の芝浜・品川・中川では七・八月に官客・市人が画船を浮かべ、水嬉をもよおして、争ってこれを釣る。」
- (83) 編室松岩雄『類聚近世風俗志』(「守貞漫稿」喜田川守貞)榎本書房、一九二七年
- (84) 大橋青湖『釣魚秘伝集』(「何羨録」津軽采女、享保八年(一七二三))第一書房、一九三〇年
- (85) 『嬉遊笑覧』(「嬉遊笑覧」喜多村信節、天保元年(一八三〇))成光館、一九三三年
- (86) 森銑三、野間光辰、朝倉治彦『続燕石十種』第一巻(「釣客伝」黒田五柳)中央公論社、一九八〇年
- (87) 岡田甫『俳風柳多留全集・索引編』三省堂、一九九九年
- (88) 校注中村幸彦『近世町人思想』59(「教訓雑長持」伊藤単朴、宝暦二年(一七五二))岩波書店、一九七五年
- (89) 校注神郡周『塵塚談』俗事百工起源(「塵塚談」小川顕道文化十一年(一一八四))現代思潮社、一九八一年
- (90) 大塚貴注『大塚貴注の沖釣りパーフェクトブック』つり人社、一九九七年

- (91) 松崎明治・増補者佐藤垢石『再増補改定版新釣百科』大泉書店、一九六五年
- (92) 『日本水産学会誌』77巻2号(「炭素・窒素安定同位体比に基づく紀伊水道におけるタチウオとその他の底生魚類の炭素源の比較」土居内龍、安江尚孝、竹内照文、山内信、奥山芳生、諏訪剛、向野幹生、小久保友義、芳養晴雄、二〇一一年三月)
- (93) 『千葉水産研報』no.3(「千葉県内房海域で漁獲されるタチウオ *Trichurus lepturus* の相対成長、食性及び成熟について」田中種雄・石井光廣、二〇〇四年)
- (94) 『水産研究叢書』38(「日本海中部海域産タチウオの資源管理」日本海中部海域タチウオ共同研究チーム) 社団法人日本水産資源保護協会、一九八八年
- (95) 『沖縄県水産試験場事業報告書』(「タチウオ漁場調査」大嶋洋行・外間実) www.prefokinawa.jp/fish/jihout06/
- (96) 「平成二十四年度タチウオ日本海・東シナ海系群の資源評価」西海区水産研究所(酒井猛、塚本洋一) abchanfra.go.jp/digests24/details/2452.pdf
- (97) 「古い手帳」二〇〇五年以降、釣行後、船名、潮、釣果の種類と数などを記していた。
- (98) 長野船長のブログ
- (99) 『船釣りフェスタ 二〇一四 in 京セラドーム大阪』矢野貴雄
- (100) 『船 二〇一五 new fune fishing tackles (シマノのカタログ) 今井浩次